

## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ&gt;IV 児童生徒意識調査の結果の分析

## 児童生徒意識調査の結果の分析

## 1 学校生活

- 学校での生活は楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学校・中学校とも8割を上回っている。[図1]
- 「学校は楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」と回答している児童生徒ほど、ともに正答率が高くなっている。[図3][図6]
- 「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」の問いに、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて高くなっている。[図9]  
ただし、先生に相談する児童生徒の割合は、各学年とも年々増加している。[図7]

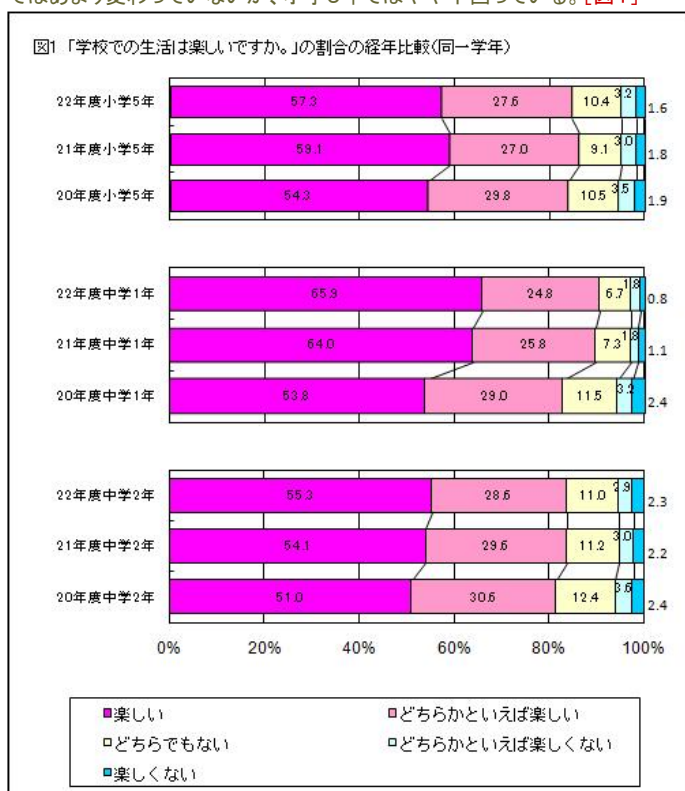
ここでは、[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリーからなる設問を通して、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさ、勉強に対する興味、学習状況や教師との関係、友達をつくることについての考えなどの設問について分析した。

(グラフ中の20年度調査結果については、12月に調査を実施しての結果である。)

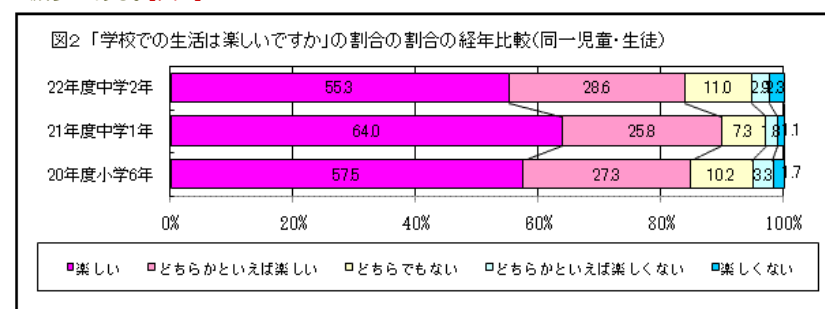
## 「学校での生活は楽しいですか」という設問について

「学校での生活は楽しいですか」という設問については、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年57.3%、中学1年65.9%、中学2年55.3%になっている。「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合を合わせると各学年とも8割を上回っている。

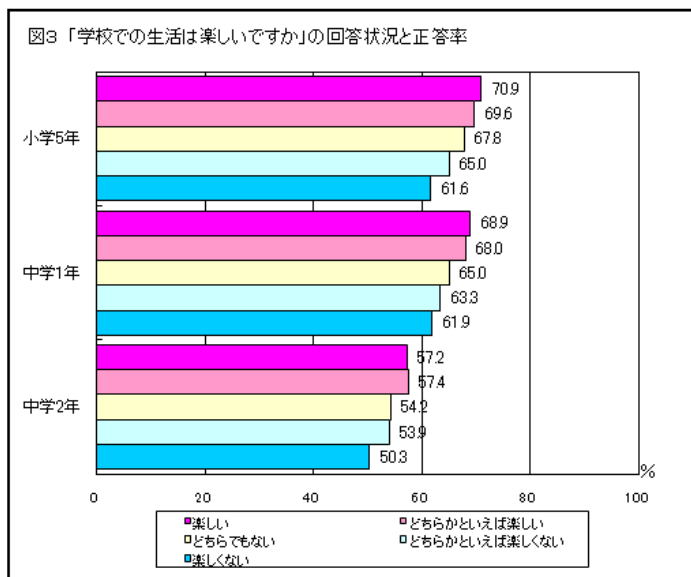
この設問について前年度調査と比較すると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、中学1年と中学2年についてはあまり変わっていないが、小学5年ではやや下回っている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては5.0ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては5.9ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては0.9ポイントの減少である。[図2]



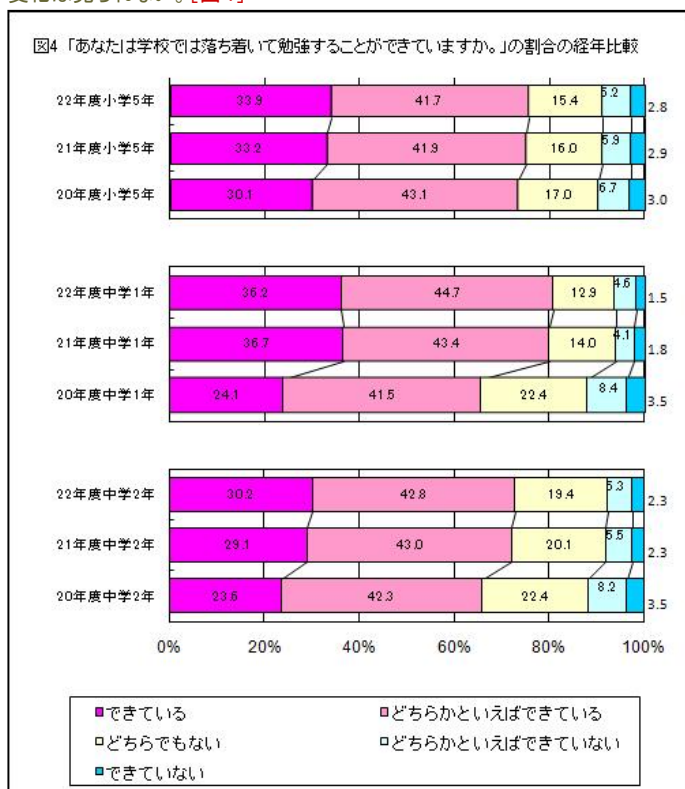
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図3]



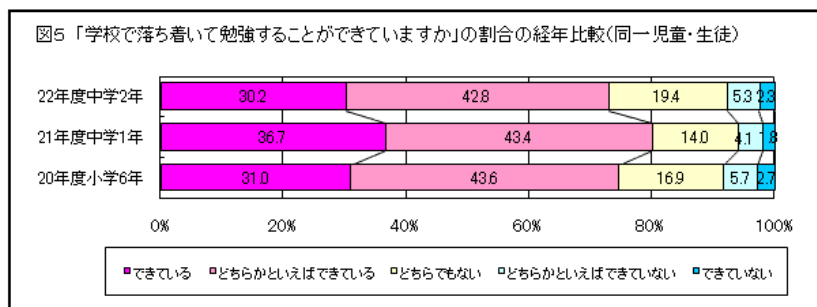
「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問について

「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問については、「できている」と回答した児童生徒の割合は、小学5年33.9%、中学1年36.2%、中学2年30.2%になっている。「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも7割を上回っている。

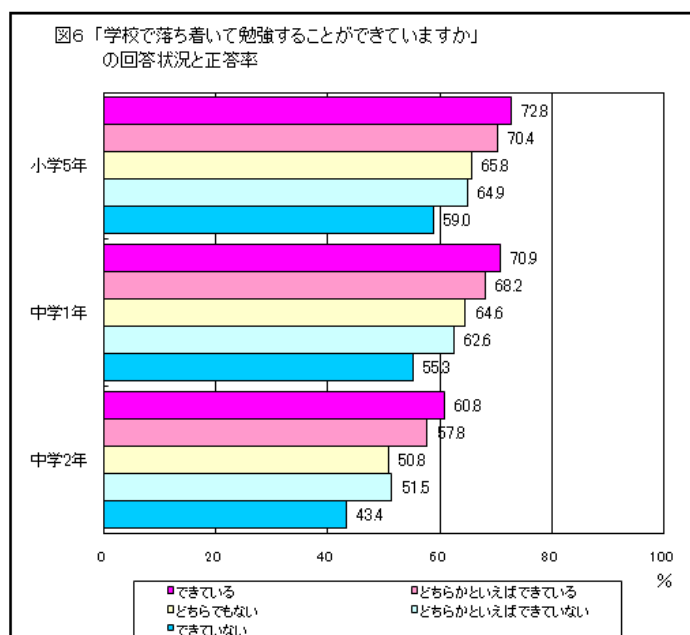
この設問について前年度調査と比較すると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては5.5ポイント増加しているが、中学1年から2年にかけては7.1ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては1.6ポイントの減少である。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「できている」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



## 「学校での生活は楽しいですか」と「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問の関連性について

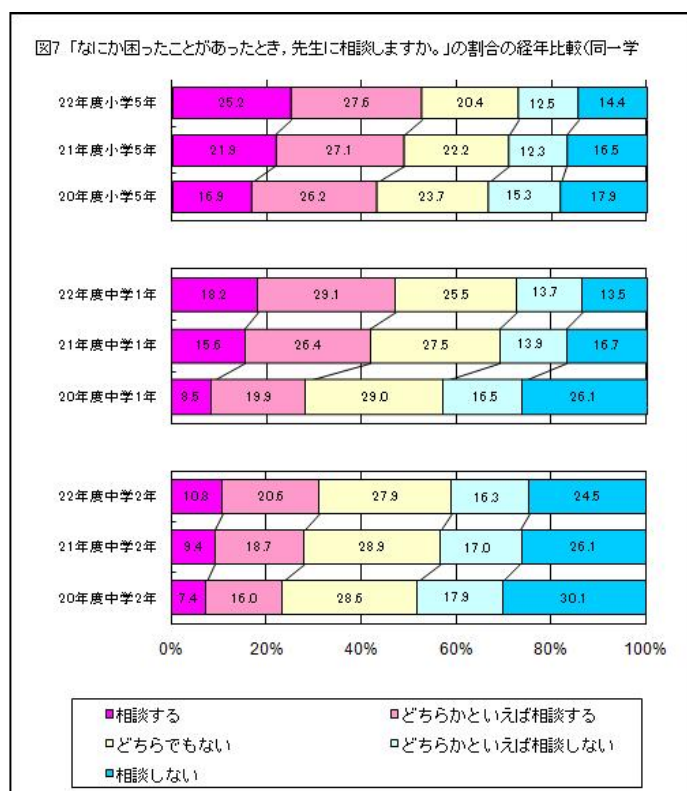
この2つの調査から、「学校生活の楽しさ」と同様に「落ち着いた学習への取り組み」と学力の定着には関係があるといえる。また、共通して小学5年から中学校2年にかけて「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが同じような減少化傾向が見られた。このことは、発達の段階や学習内容など様々な原因が考えられるが、課題として受け止めるべきである。小学校と中学校の接続については、学校区単位での児童生徒にかかわる情報交換や授業交流などの小中連携の取組をなお一層進めていくことが重要であるとする。

また、落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制づくりに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなる。

## 「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問について

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問については、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学5年52.8%、中学1年47.3%、中学2年31.4%であり、学年が上がるにつれて低下する傾向が、本年度の調査においても見られた。また逆に、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学5年26.9%、中学1年27.2%、中学2年40.8%であり、学年が上がるにつれて、高くなっている。

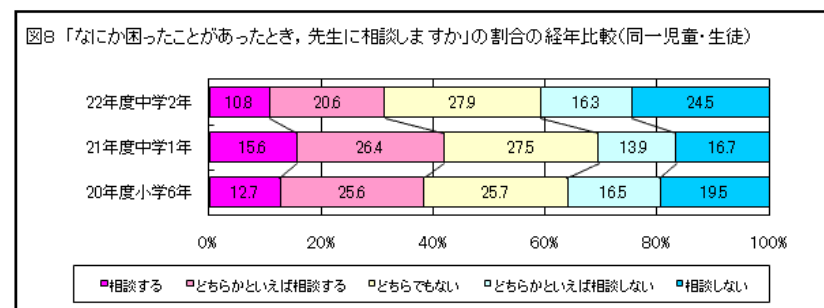
この設問についての経年比較をすると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は各学年とも年々高くなり、逆に「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合が各学年とも年々低くなっている。【図7】



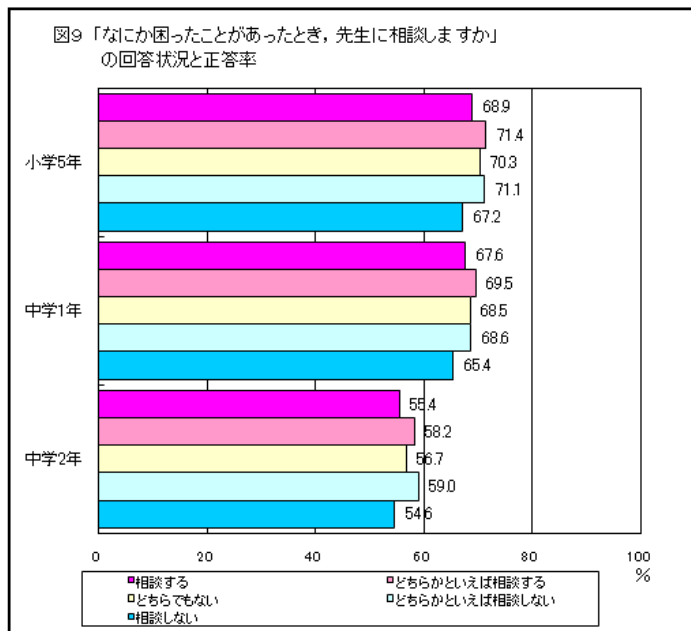
同一児童生徒の経年比較で見ると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて3.7ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.6ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、6.9ポイントの減少である。

また逆に、「相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて5.4ポイント減少しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.2ポイント増加している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、4.8ポイントの増加である。

【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、各学年とも明らかな特徴は見られない。[図9]

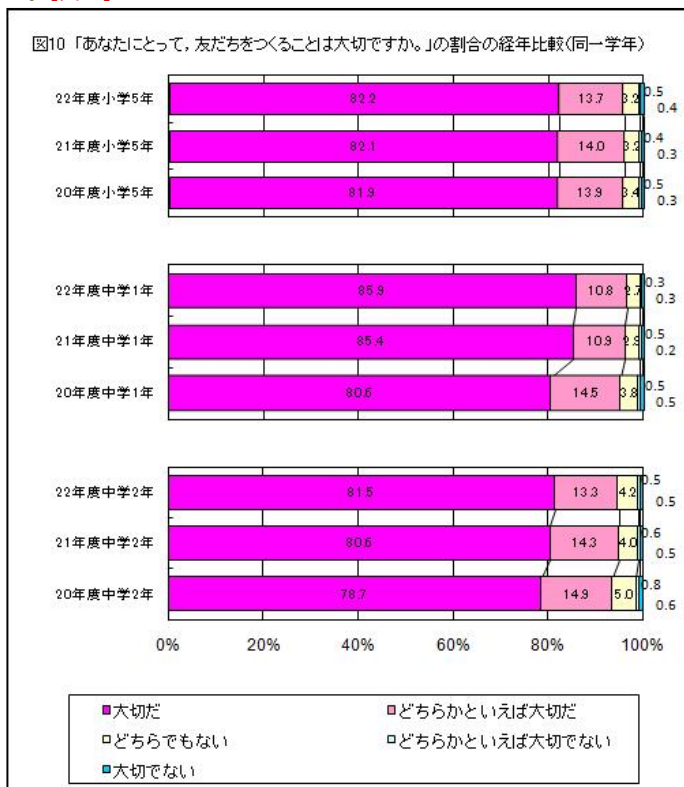


児童生徒の発達段階に応じて児童生徒と教師が良好な関係を保つことは大切なことである。教科担任制となる中学校においても、学級担任のみならず、教師が個々の生徒とのよりよい関係を構築する工夫が必要であろう。

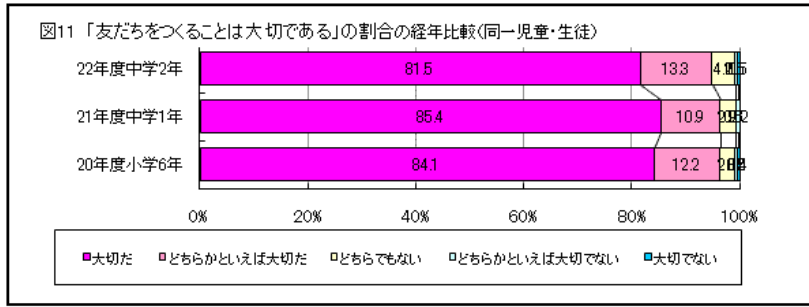
「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問について

「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問については、「大切だ」と回答した児童生徒の割合は、小学5年82.2%、中学1年85.9%、中学2年81.5%になっている。「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

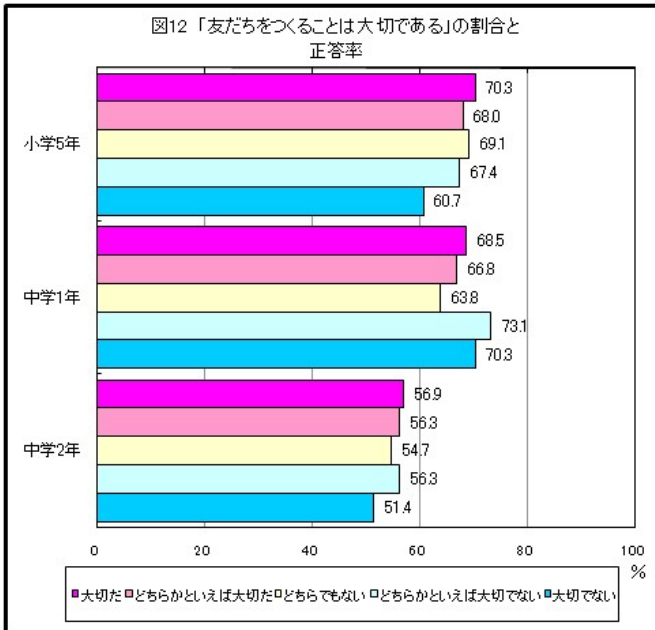
この設問を前年度調査と比較すると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図10]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけては、やや低下している。[図11]

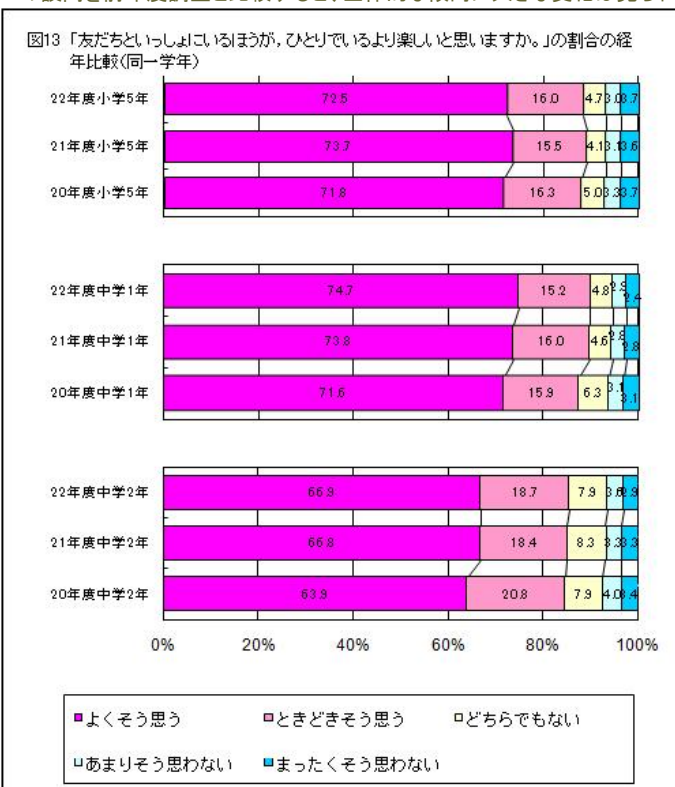


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年と中学2年では、「大切だ」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっており、以下については全体的に正答率が低くなっている。中学1年では、同様の傾向は見られないが、「どちらかといえば大切でない」、「大切でない」と回答した生徒の人数の割合は0.6%と小さいため、比較する際には注意が必要である。[図12]

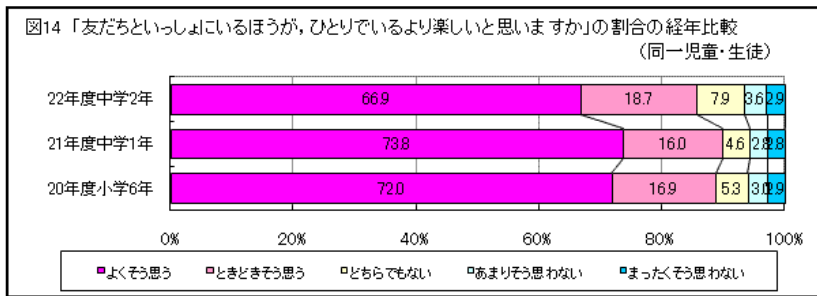


「友だちといっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年72.5%、中学1年74.7%、中学2年66.9%となっており、中学2年が他学年に比べて低くなっている。しかし、「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも8割を上回っている。

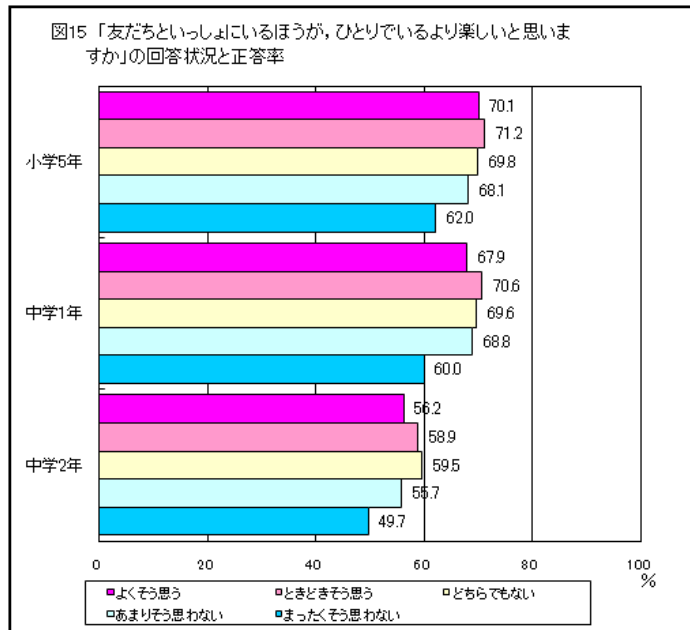
この設問を前年度調査と比較すると、全体的な傾向に大きな変化は見られない。[図13]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒が中学1年から中学2年にかけて6.9ポイント減少している。[図14]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図15] ただし、図14に示しているように「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%前後と小さいため、比較する際は注意が必要である。



最終更新日: 2011-1-31

## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

### 児童生徒意識調査の結果の分析

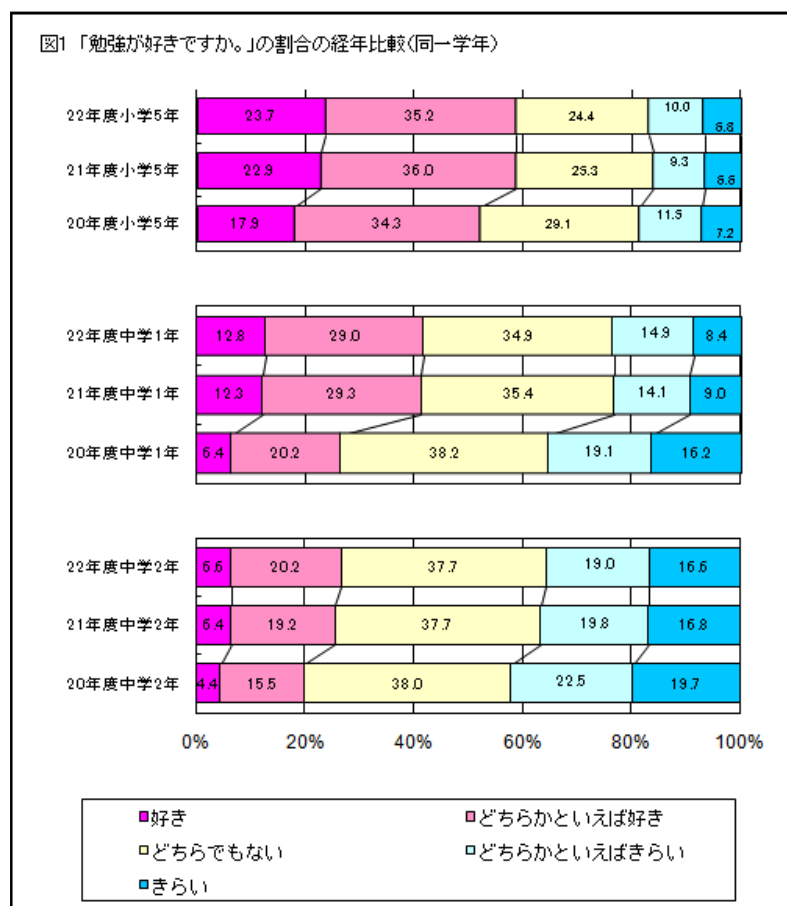
#### 2 学習動機

- 「勉強が好き」と回答している児童生徒は、学年が上がるにつれて減少する傾向が見られる。しかし、勉強が好きな児童生徒は、各学年とも年々増加している。[図1][図2]  
また、勉強が好きな生徒ほど、正答率が高くなっている。[図3]
- 学校での勉強は、大人になって役に立つと思っている児童生徒の割合は、小学校は9割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図4]  
また、役に立つと思っている児童生徒ほど、正答率が高くなっている。[図6]
- 「大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がある」と答えた児童生徒は、小学校は8割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図7]

ここでは、勉強に対する興味・関心やその有用性、大人になってからかなえてみたい仕事(小学校では夢)の有無などについての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

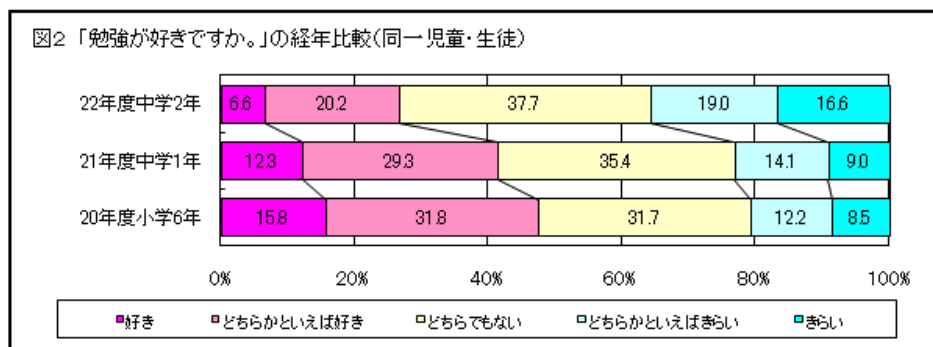
「勉強が好きですか」という設問については、「好き」と回答した児童生徒の割合が小学5年23.7%、中学1年12.8%、中学2年6.6%になっている。「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では5割を上回っているが、学年が上がるにつれて低くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、「好き」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっているが、小学5年生で0.8ポイント増加、中学1年で0.5ポイント増加、中学2年で0.2ポイント増加と伸びは小さい。。[図1]

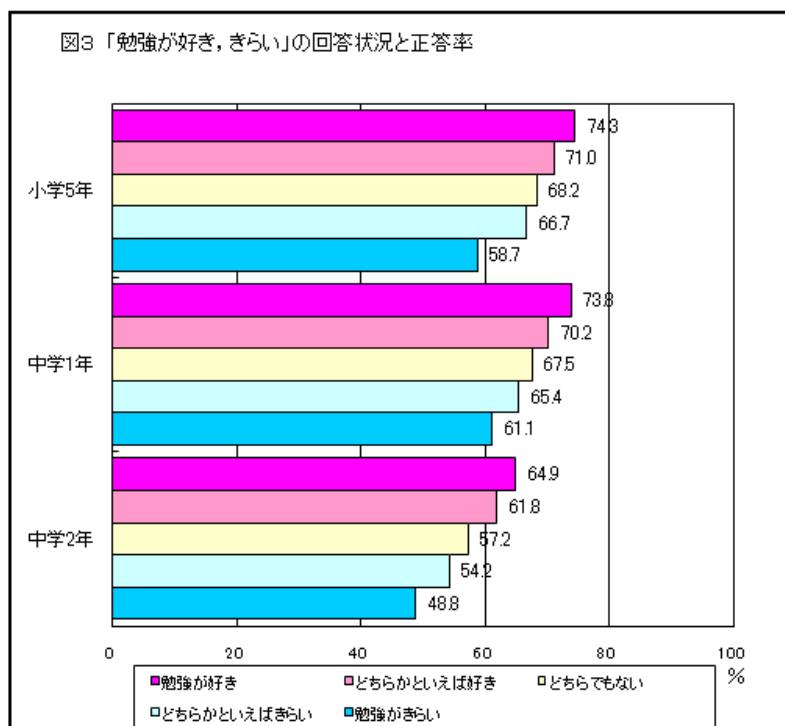




同一児童生徒の経年比較で見ると、「好き」、「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて6.0ポイント減少している。中学1年から中学2年にかけては14.8ポイントと大きく減少している。【図2】



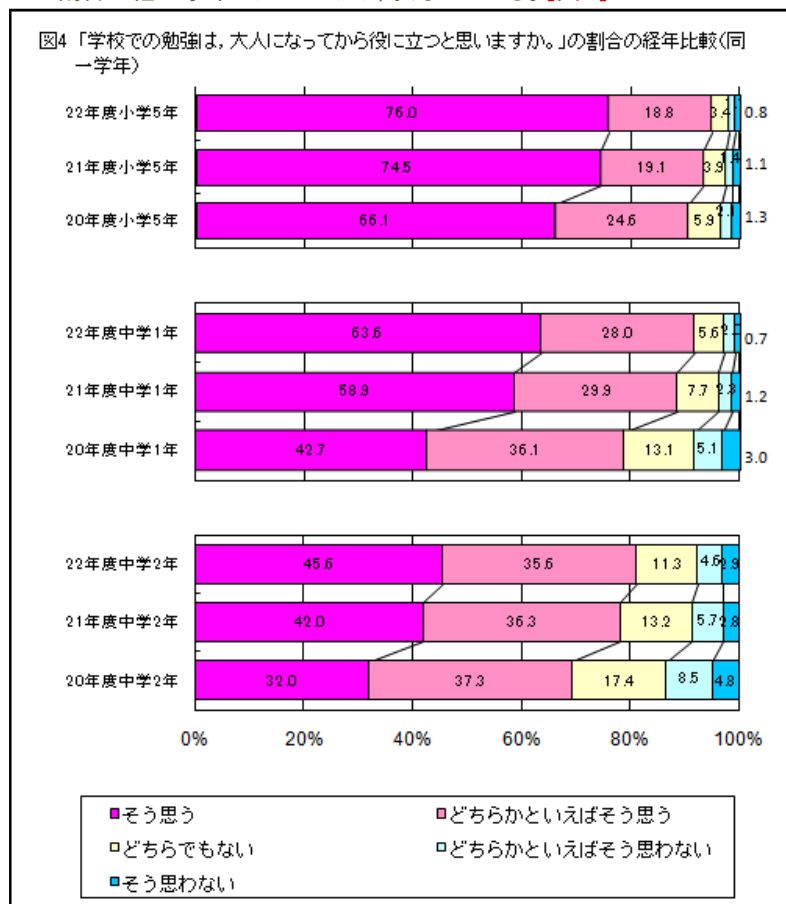
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「勉強が好き」と回答した児童生徒の正答率もっとも高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。【図3】



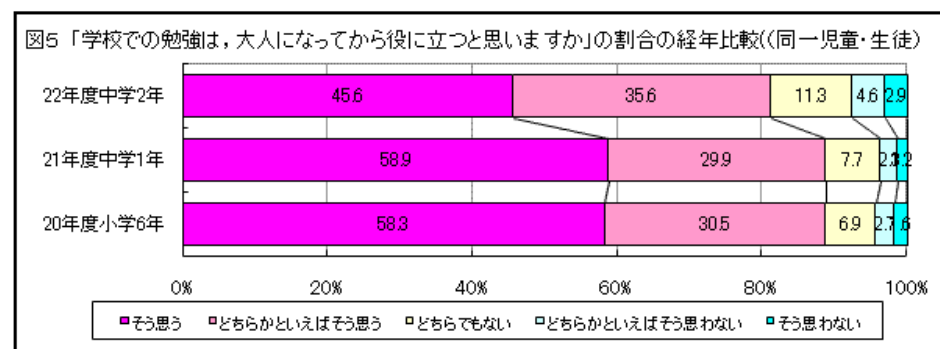
この調査から、勉強が好きということと学力の定着には深い関係があるといえる。学年が上がるにつれて勉強を好きな児童生徒が減ることについては、発達の段階や学習内容に起因することも考えられるが、大きな課題である。小学校と中学校のスムーズな接続や中学校における指導法改善等を図っていくことが大切である。

「学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年76.0%、中学1年63.6%、中学2年45.6%になっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校は9割、中学校は8割を上回っている。

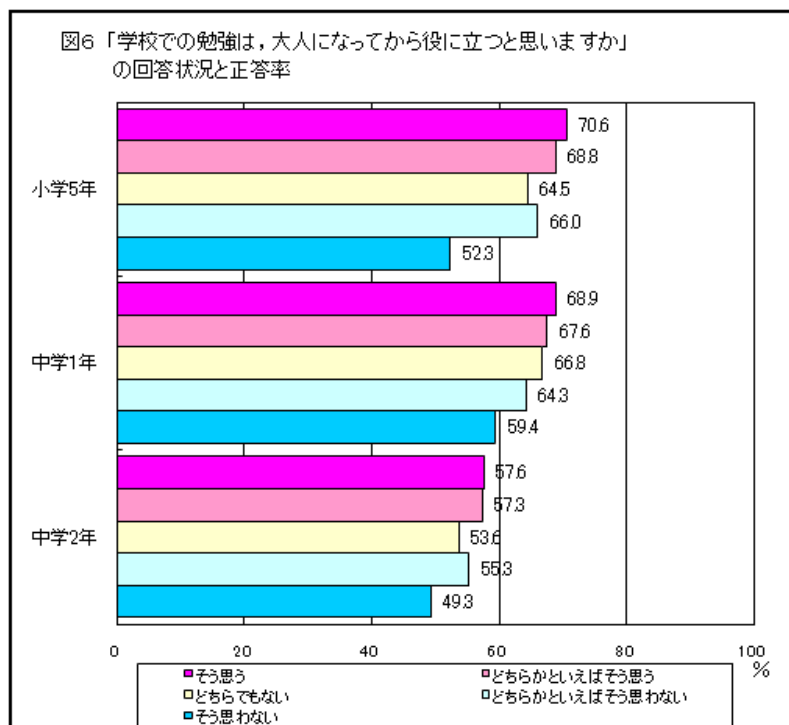
この設問を前年度調査と比較すると、「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。一方、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した児童生徒の割合は、減少しているが、中学2年での割合が他の学年に比べてやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけて[そう思う]、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合は7.6ポイント減少している。これに対し、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した生徒が4.0ポイント増加している。[図5]



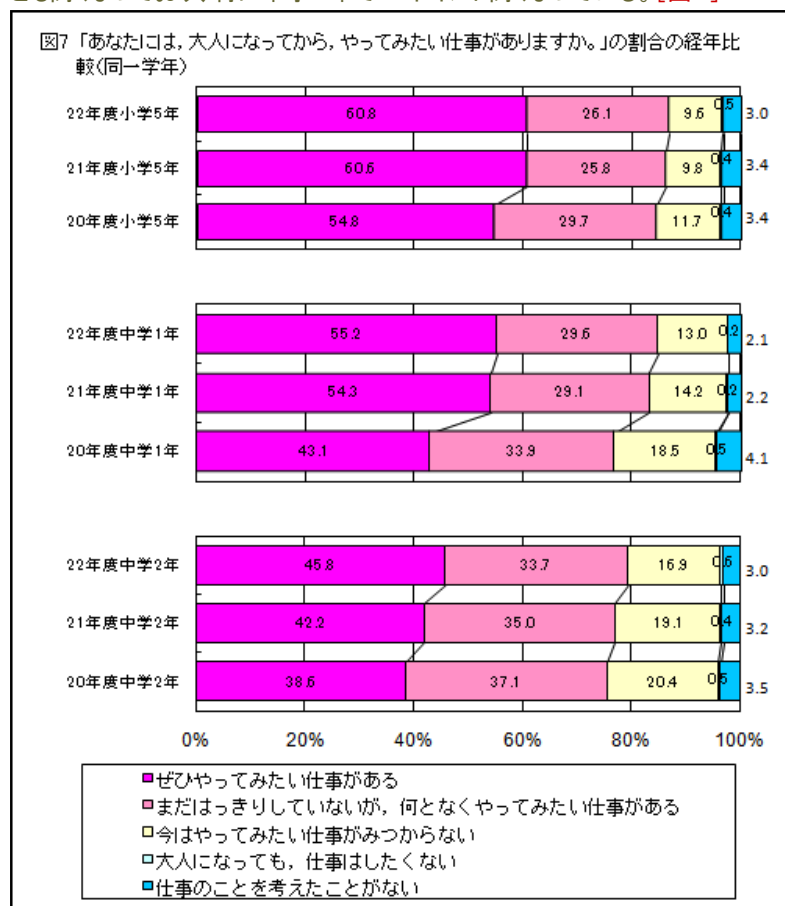
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



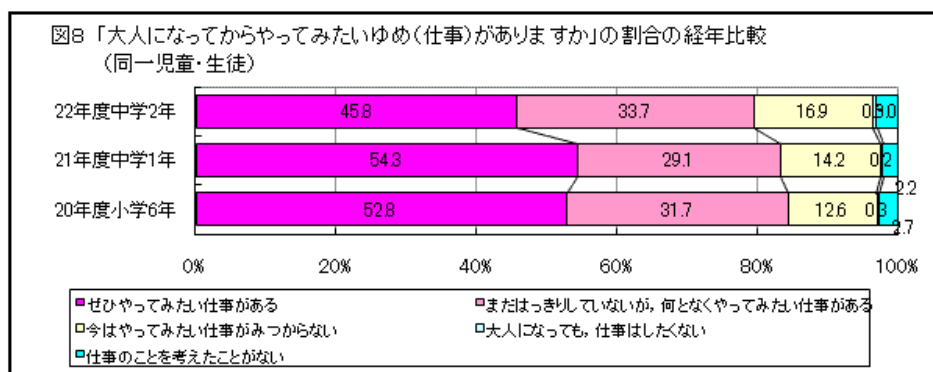
各教科の学習が、知識の習得だけで終わることなく、日常生活との関連や将来における社会とのつながりなどを意識した指導となるよう工夫が求められている。また、キャリア教育との関連性を含め、知識の習得と活用が将来的に生きていく上でどのように役に立つのかということ、小学校の段階から系統的に提示していく必要がある。

「あなたは大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がありますか」という設問については、「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合が小学5年60.8%、中学1年55.2%、中学2年45.8%になっている。「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学5年と中学1年は8割、中学2年は7割を上回っている。

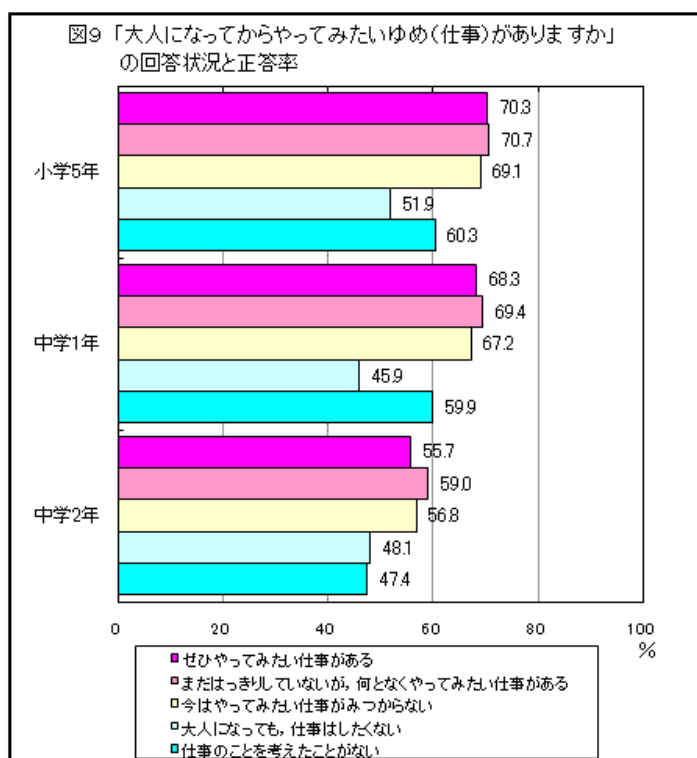
この設問を前年度調査と比較すると、「ぜひやってみたいと仕事がある」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっており、特に中学2年で3.6ポイント高くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年生から中学2年生にかけて「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した生徒の割合が8.5ポイント減少している。[図8]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「ぜひやってみたい仕事がある」、「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の正答率が全体的に高くなっており、「大人になっても、仕事はしたくない」、「仕事のことを考えたことがない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図9]



民間の教育機関が行った調査では、中学生・高校生について「将来の職業に興味をもったとき」や「将来行きたい学校がはっきり決まったとき」に学習意欲が高まるとの調査結果が出されており、将来の夢や目標をもたせることは大切である。従来の特別活動における進路指導に加えて、キャリア教育の視点などを加味した継続的・系統的な指導が必要である。夢やあこがれの職業、就きたい仕事、なりたい人物像、夢や目標を達成するために何をすればよいのか等について、児童生徒が自分の将来についてより具体的に考え、希望を持てるように支援することが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

### 児童生徒意識調査の結果の分析

#### 3 学習活動(教科全般)

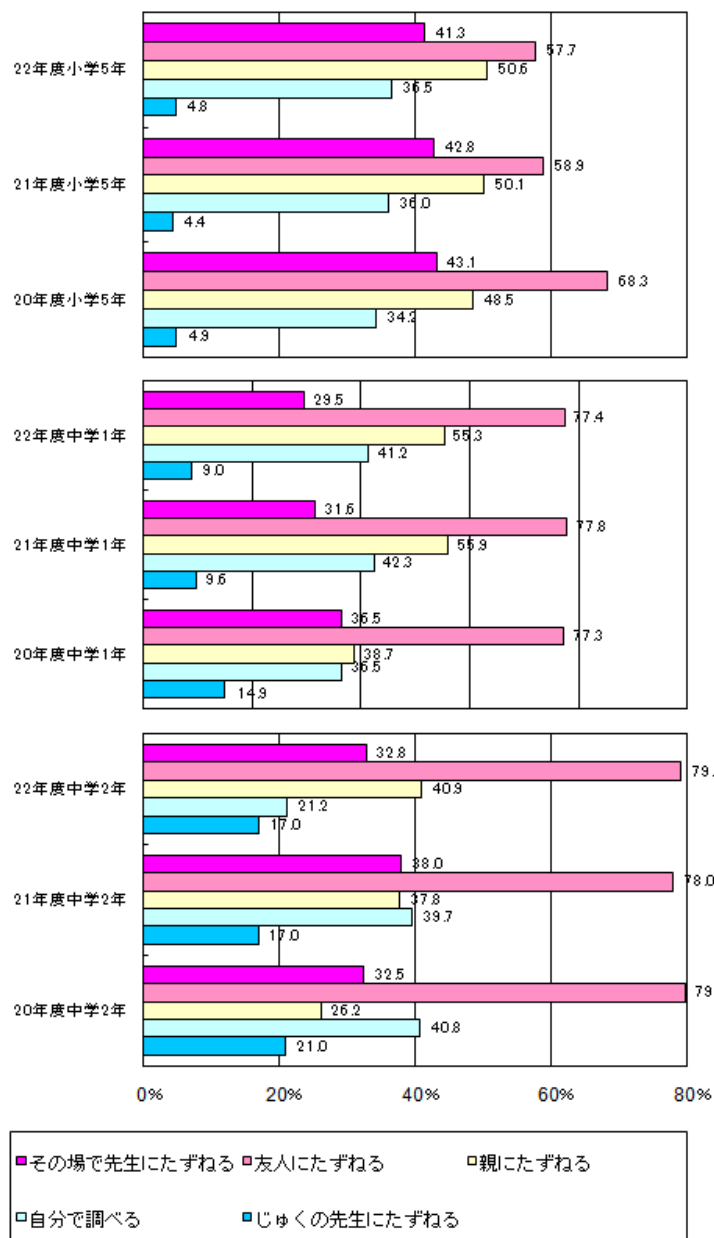
- 授業中で分からないときは、「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合がすべての学年で最も高く、学年が上がるごとに増加する傾向が見られる。[図1] 「そのままにしておく」と回答した児童生徒の割合は小学5年と中学1年は1割以上、中学2年は2割以上であり、課題である。[図3]
- 家庭学習の時間は、全体的に学年が上がるにつれて、増加している。[図4][図5]
- 学校の授業以外の勉強については、中学校では、「試験があれば、それにそなえて勉強する」の割合が高くなるが、逆に「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」の割合が低くなっている。[図7][図8]

ここでは、授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学校内外における学習活動についての設問から児童生徒の教科全般における学習活動についての調査結果を述べる。

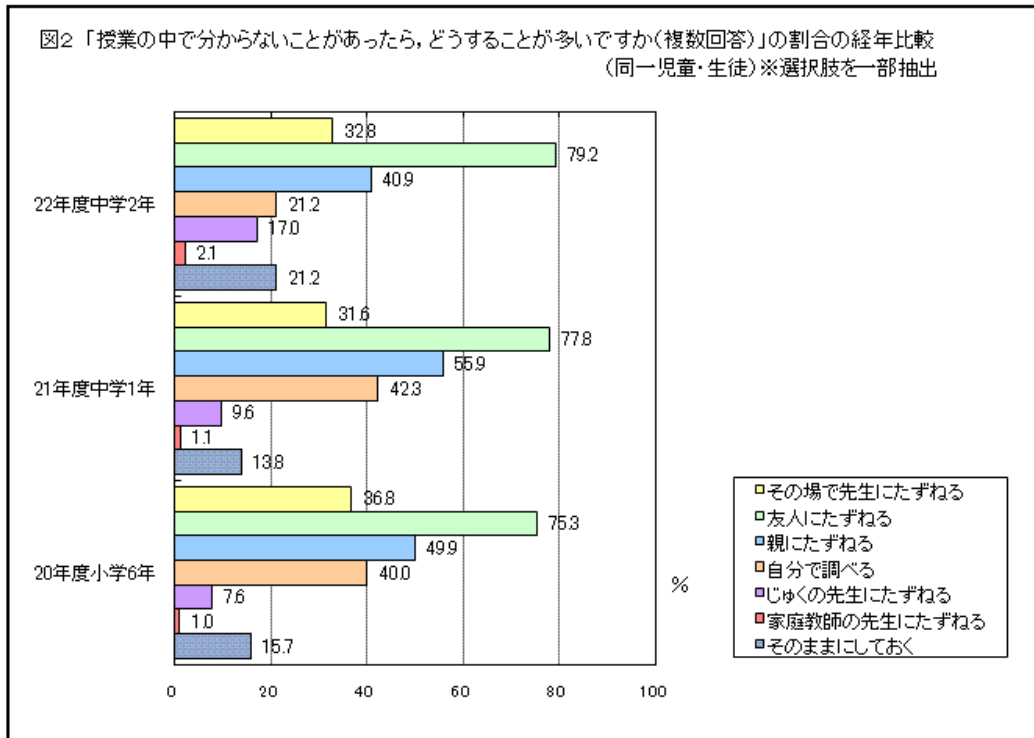
**「授業の中で分からないことがあったらどうすることが多いですか」(複数回答)**という設問については、すべての学年において「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年57.7%、中学1年77.4%、中学2年79.2%と、学年が上がるにつれて、その割合が高くなる傾向が見られる。以下、小学5年と中学2年については「親にたずねる」「その場で先生にたずねる」、中学1年では「親にたずねる」「自分で調べる」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学1年では、全体として大きな変化は見られないが、中学2年では「自分で調べる」、次いで「その場で先生にたずねる」と回答した生徒の割合がやや低くなっていることが、気にかかる。**[図1]**

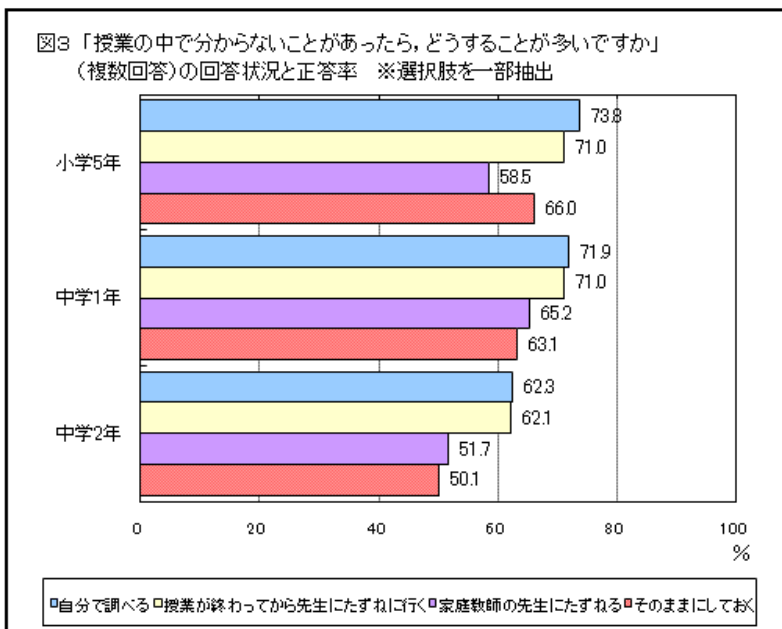
図1 「授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年) ※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては、各解決方法の項目において「その場で先生にたずねる」以外は数値が増え、逆に「そのままにしておく」が減っている。しかし、中学1年から2年にかけては、数値が増えている解決方法の項目もあるが、「自分で調べる」と「親にたずねる」が大きく減っており、逆に「そのままにしている」が増えていることが気にかかる。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年と中学校1年では、「自分で調べる」「授業が終わってから先生にたずねに行く」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。中学校2年においても、同様の特徴は見られるが、小学5年や中学1年と比べると、分からなかったところをそのまま放置しておく傾向が強い。[図3]



自分で調べようとする意欲や授業後に先生に尋ねて解決しようという態度は学習にもよい影響を与える。分からないことをそのままにしている児童生徒はますます分からなくなり、意欲も更にながるといふ悪循環に陥っている。まずは、「そのままにしておく」と回答した児童生徒に対する個別の対応を行う必要がある。改善に向けての方策としては、個々の児童生徒の状況を把握する中で、わずかでも得意と思われる教科や興味を示す学習内容などを拾い出し、その部分を足がかりにして学習意欲の向上につなげるような指導が考えられる。

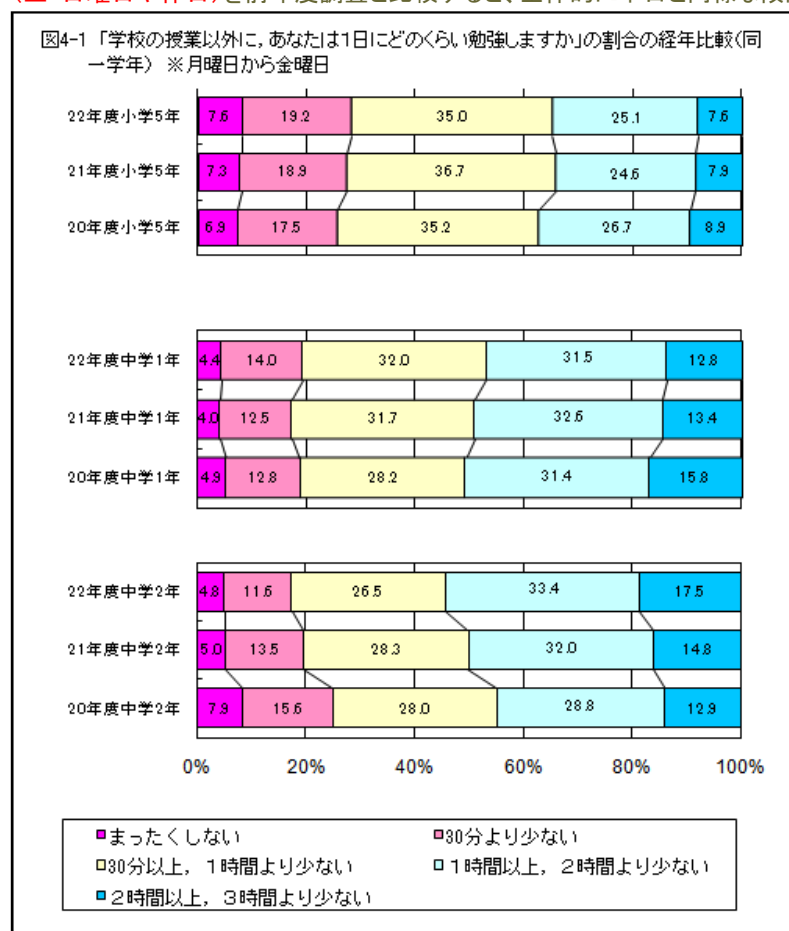


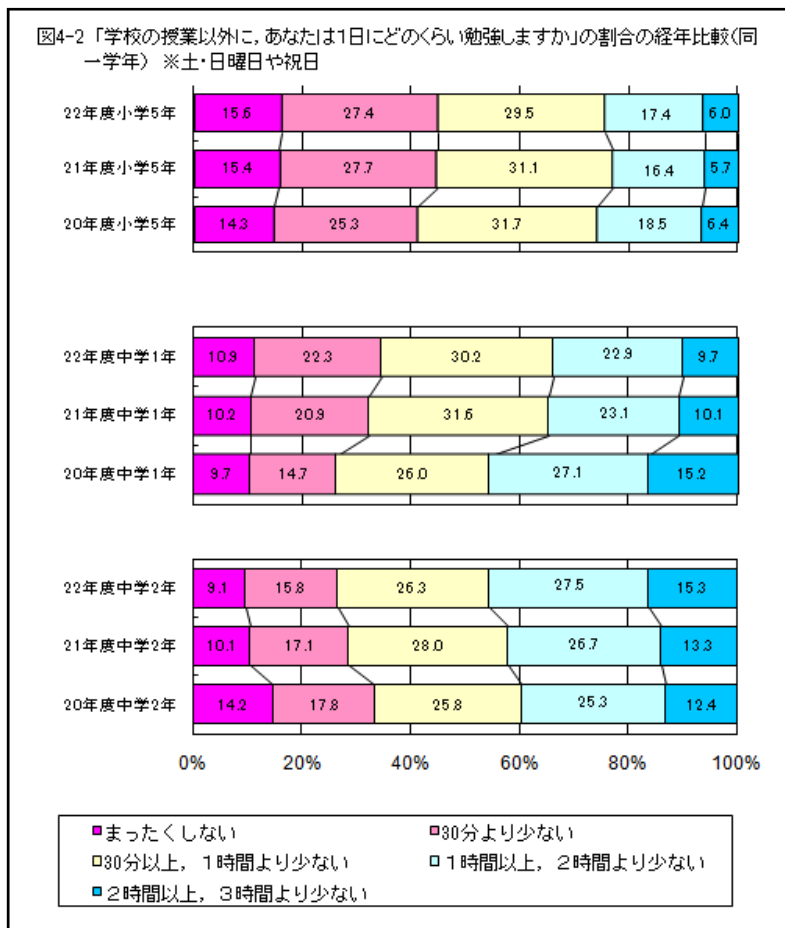
「学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか」(月曜日から金曜日)という設問については、学年が上がるごとに2時間以上勉強している児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。このことは土・日曜日や休日についても同様である。「30分以上1時間より少ない」又は「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合は小学5年60.1%、中学1年63.5%、中学2年59.9%であり、どの学年においも、約6割を占めている。

(土・日曜日や休日)については、平日よりも勉強時間が少なくなる傾向が見られる。学習時間が1時間より少ないと回答した児童生徒の割合が小学5年は72.5%、中学1年は63.4%、中学2年は51.2%と、学年が上がるにつれて少なくなる傾向は見られるが、各学年とも5割を上回っている。

この設問(月曜日から金曜日)を前年度調査と比較すると、小学5年については、全体的に大きな変化は見られないが、中学1年ではやや勉強時間が減少している傾向が見られる。中学2年では全体的に勉強時間が増加している傾向が見られる。

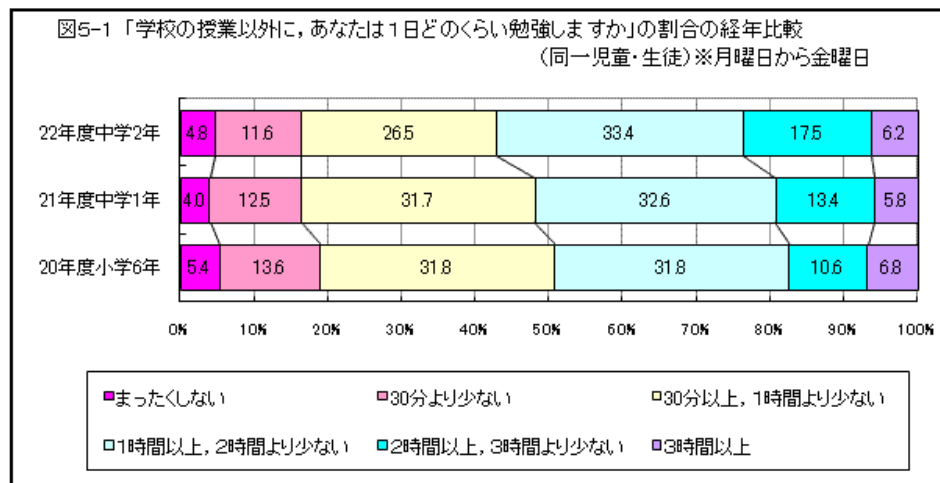
(土・日曜日や休日)を前年度調査と比較すると、全体的に平日と同様な傾向が見られる。[図4]

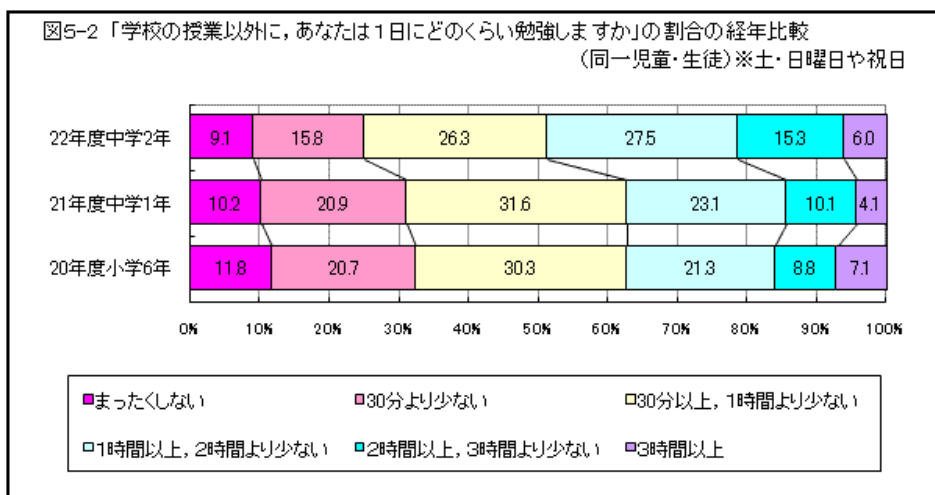




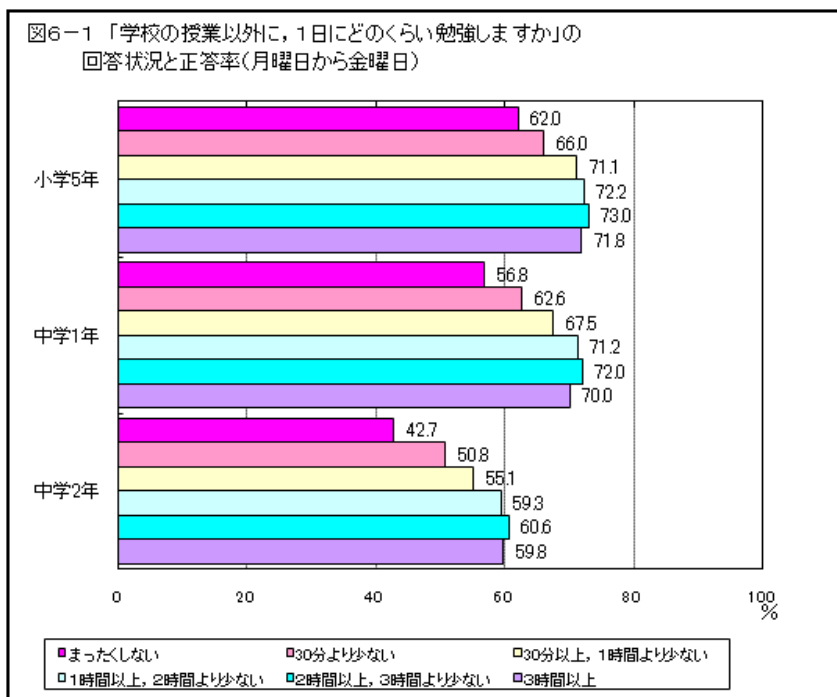
同一児童生徒の経年比較で見ると、(月曜日から金曜日)について、学年が上がるにつれて、全体的に勉強時間が増えている。

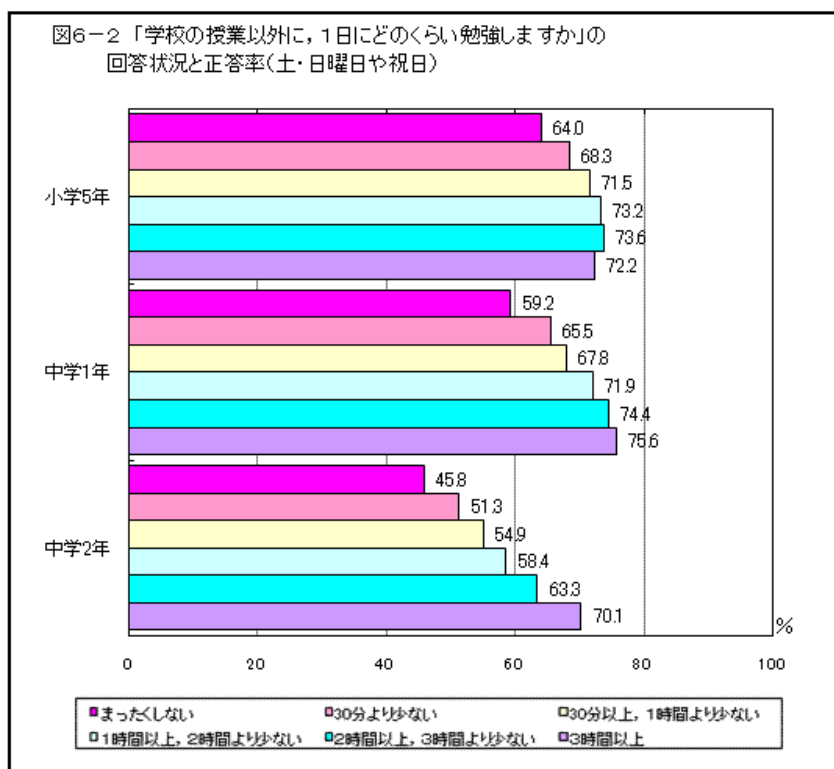
(土・日曜日や休日)についても、平日と同様学年が上がるごとに勉強時間も増えている。[図5]





回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、(月曜日から金曜日)(土・日曜日や休日)共に、全体的にすべての学年において勉強時間が長い方が正答率が高くなる傾向が見られ、「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。[図6]



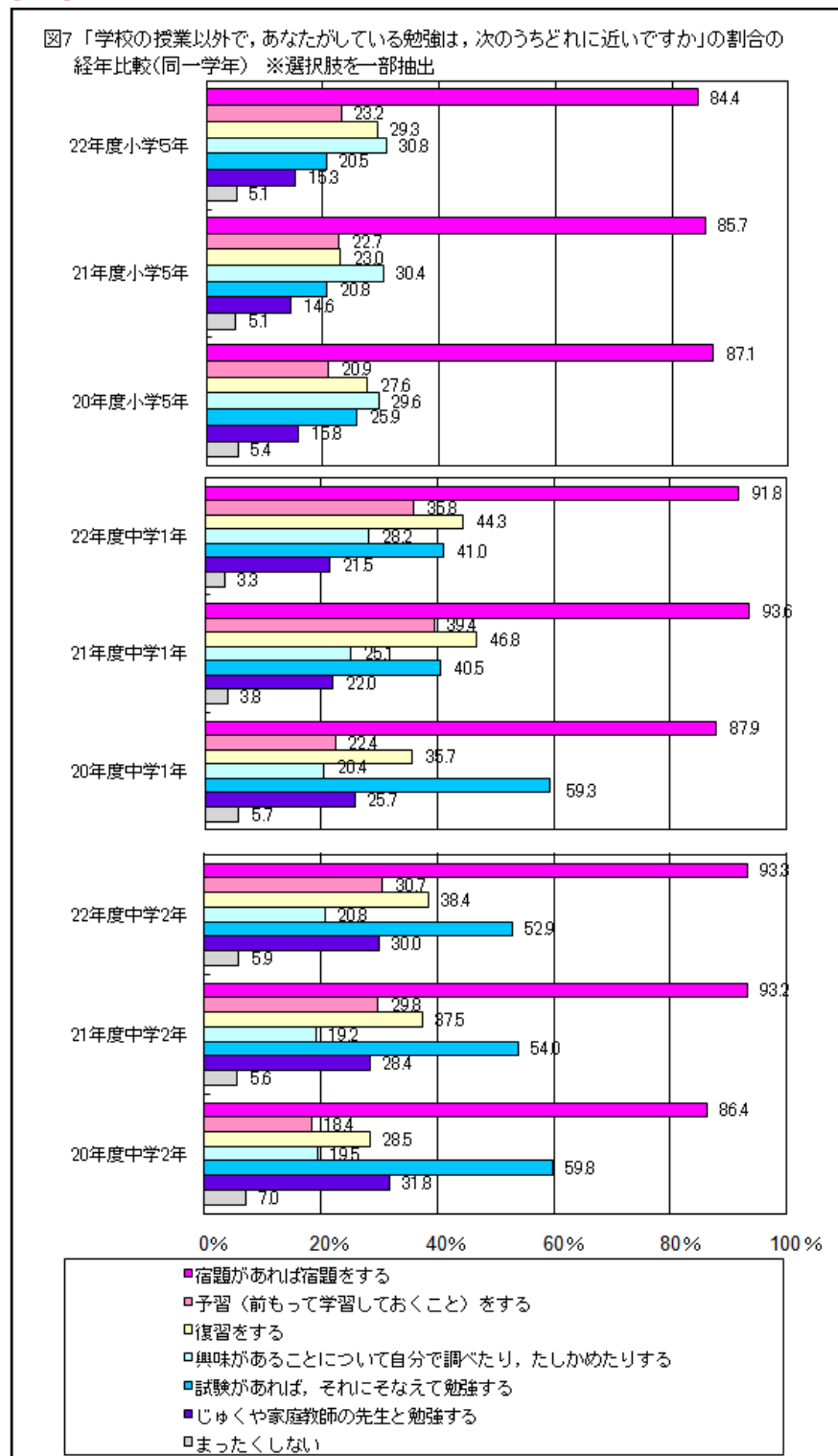


家庭学習に取り組む時間をのばすためには、家庭学習をはじめとする授業以外の学習の重要性について指導するとともに、オリエンテーションの場を設けるなどして、予習・復習の仕方等について具体的に繰り返し指導することが必要であろう。また部活動等により、家庭で過ごす時間が全体的に少なくなる中学生については、1日の生活時間を見直させて、学習時間を確保することが望まれる。

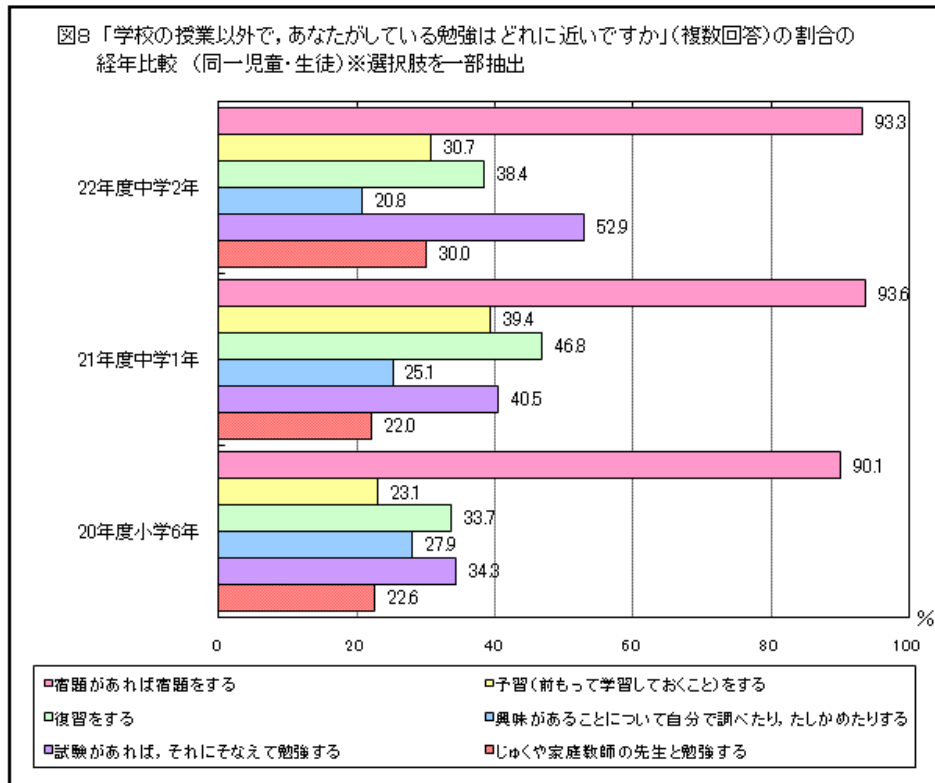
「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」(複数回答)という設問については、中学生は小学生に比べて試験に向けた勉強をする割合が高くなる傾向が見られる。すべての学年において「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年84.4%、中学1年91.8%、中学2年93.3%になっている。以下、小学5年では「興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする」「復習をする」、中学1年では「復習をする」「試験があれば、それにそなえて勉強する」、中学2年では「試験があれば、それにそなえて勉強する」「復習をする」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、各学年ともいづらかの数値的な変化はあるが、全体的に大きな変化は見られない。

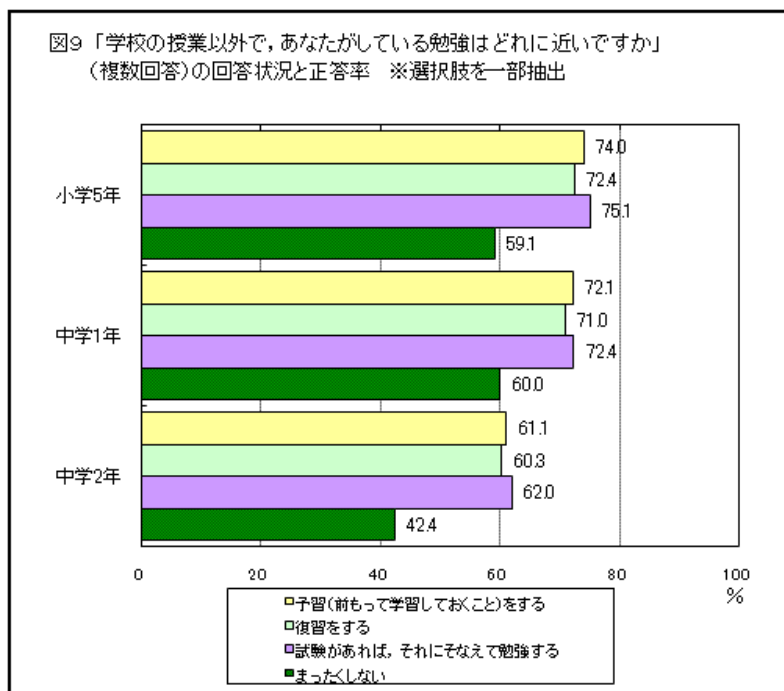
【図7】



同一児童生徒の経年比較で見ると、各学年とも「宿題があれば宿題をする」が高いことは明らかであり、少しずつ数値も上がっている。また、特徴の一つとして、学年が上がるにつれて「試験があれば、それにそなえて勉強する」が増えているのに対し、「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」が減っている。〔図8〕



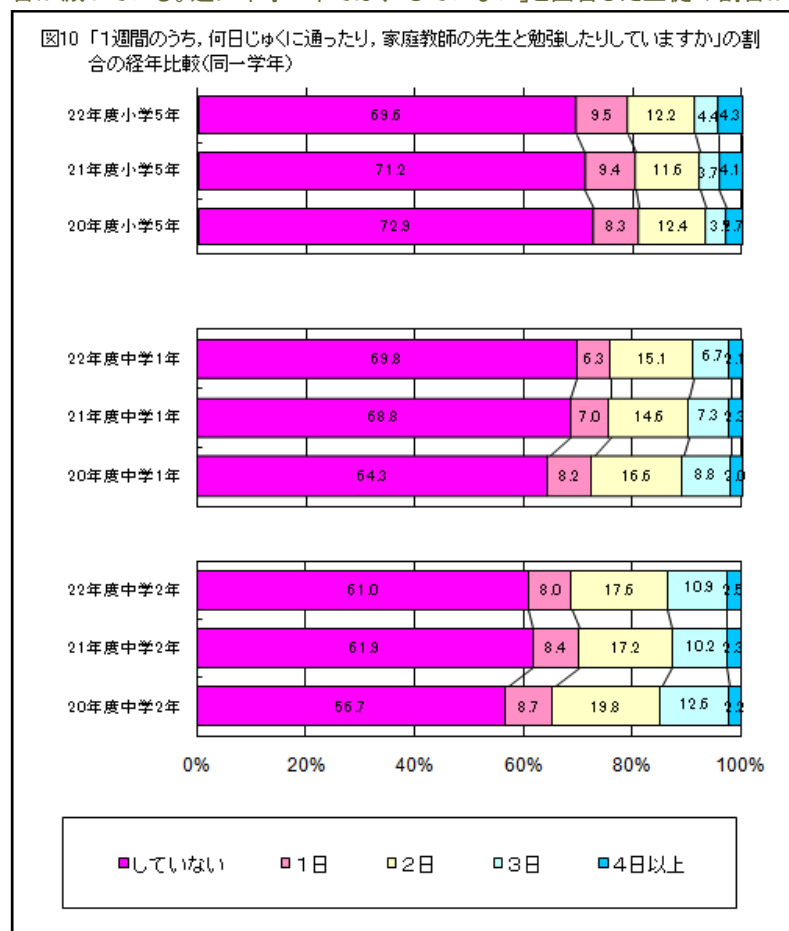
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、各学年に共通して勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。〔図9〕



「まったくしない」と回答した児童生徒が各学年5%ほどの割合である。そして図6と図9で明らかなように、勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の平均正答率は他と比べて低くなっている。各学校においては、勉強をまったくしないと回答している児童生徒を把握し、学力面や家庭環境などの視点からその理由について考え、個別に改善に向けての取組や支援をしていくことが必要である。全体的な取り組みとしては、学習の手引きを活用したり、学習の意義等について家庭との連携を図ったりすることが考えられる。また、「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が約9割に上ることから、宿題の出し方や授業への生かし方等について、各教科や学校全体で検討し、改善していくことも、学力の向上に大きな効果を生むものと考えられる。学年の発達の段階に応じた学習に対する内発的な動機を高めることが大切である。

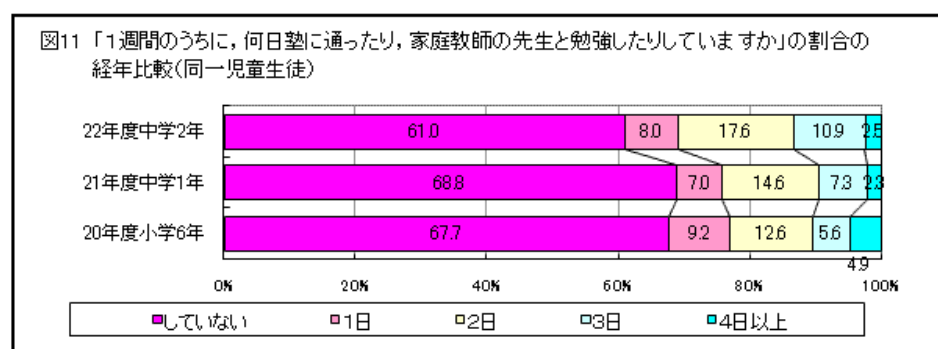
「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という設問については、すべての学年において「していない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年69.6%、中学1年69.8%、中学2年61.0%になっており、次いで「2日」と回答した児童生徒が多くなっている。また学年が上がるにつれて、「2日」「3日」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学2年では、わずかではあるが、「していない」と回答した児童生徒の割合が減っている。逆に中学1年では、「していない」と回答した生徒の割合が少し増えている。[図10]

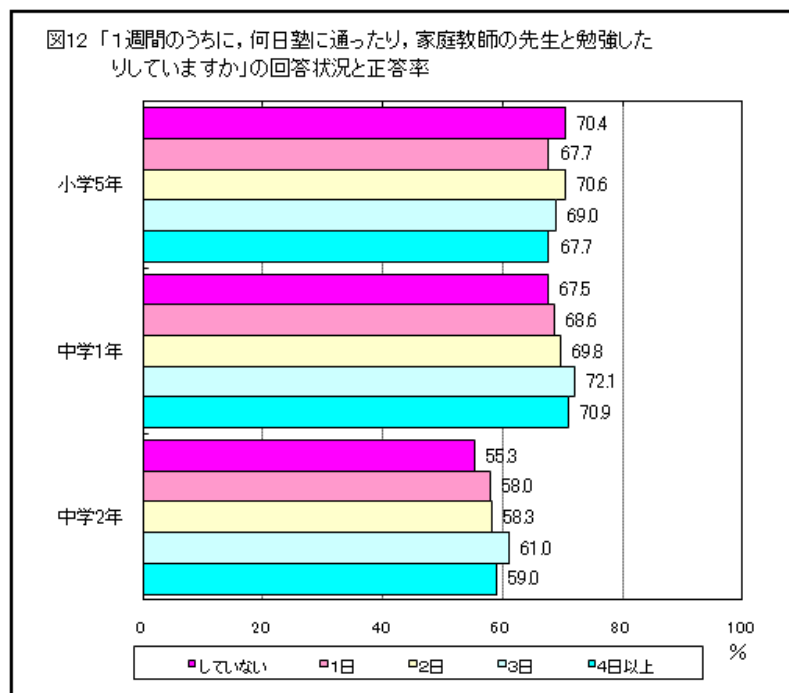


同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年から中学2年にかけて、「していない」と回答した生徒の割合が減っている。

[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では明らかな特徴は見られないが、中学1年と中学2年においては、「3日」「4日以上」と回答した生徒の正答率がいくぶん高くなっている。[図12]



「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」という設問と「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という2つの設問を比較すると、この2つの設問に共通する「まったくしない」という回答が年々減少しているということから、学校外での学習に関する意識が高まっていることが分かる。より一層の家庭学習に関する指導強化と、学校と家庭の連携が学力向上の鍵となるであろう。

最終更新日： 2011-1-31



## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ&gt; IV 児童生徒意識調査の結果の分析

## IV 児童生徒意識調査の結果の分析

## 4 生活習慣

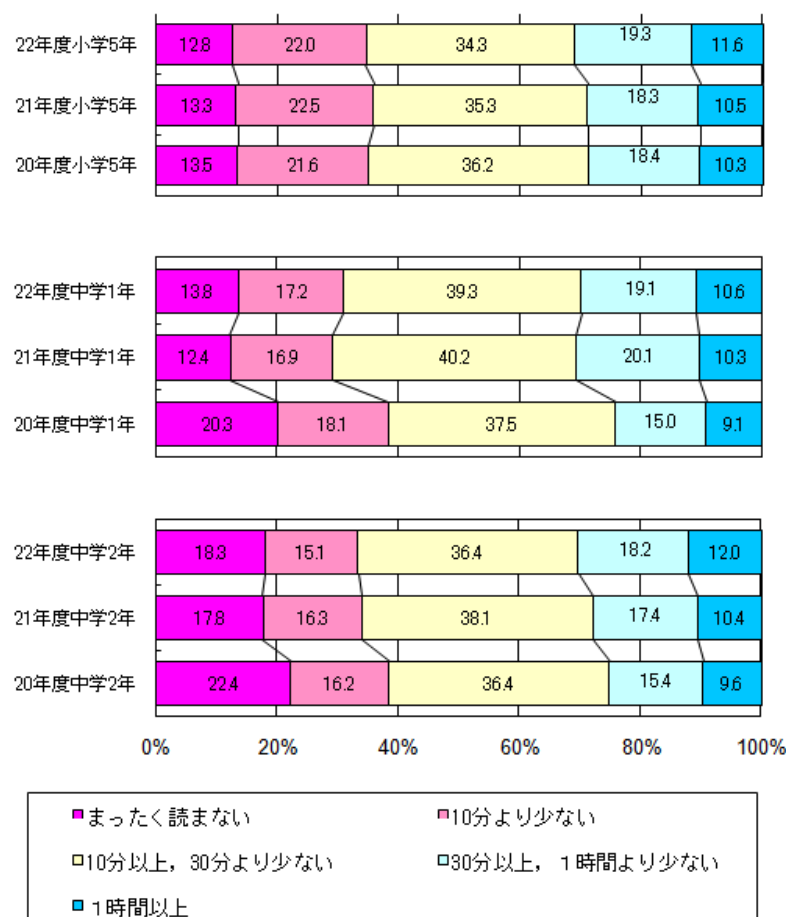
- 読書の時間について、「まったく読まない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも3割以上を占めている。[図1] また、各学年において、読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなっている。[図3]
- テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間が3時間以上である児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年17.0%、中学2年19.5%であり、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日とると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割以上である。[図10]また、朝食をきちんととっている児童生徒ほど正答率が高く、学習面にも良い影響を与えていると思われる。[図12]

この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

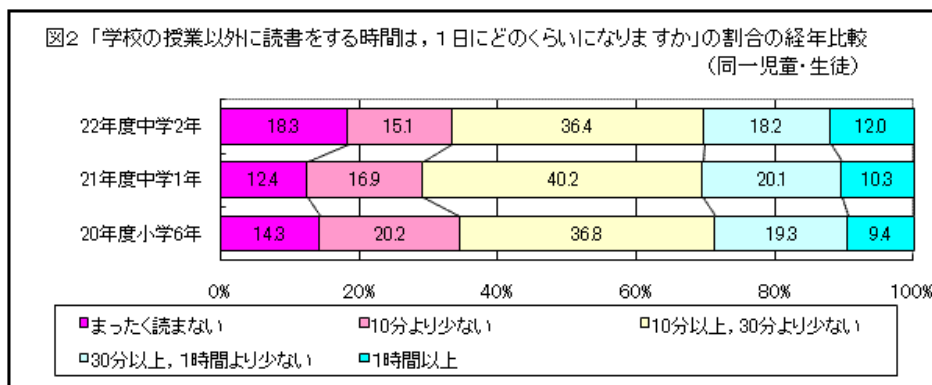
「学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合がすべての学年において最も高く、小学5年34.3%、中学1年39.3%、中学2年36.4%になっている。「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は小学5年11.6%、中学1年10.6%、中学2年12.0%になっており、各学年の約1割を占めている。また、「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、少しずつ「30分以上、1時間より少ない」「1時間以上」と回答した生徒の割合が高くなり、読書の時間が増えている。中学1年においては、昨年度と比べると、「まったく読まない」「10分より少ない」と回答した生徒の割合は少し高くなっていて、わずかではあるが読書の時間が減っている。[図1]

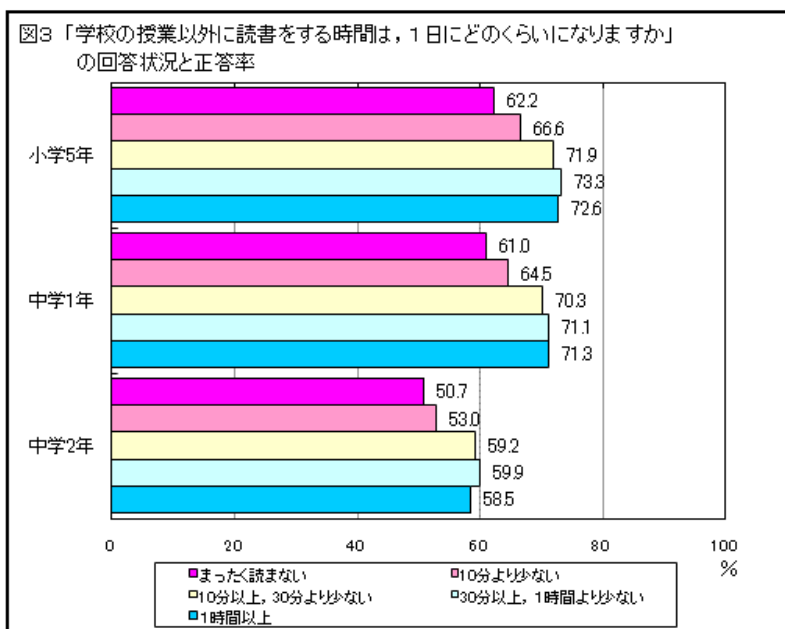
図1 「学校の授業以外に読書をする時間は、1日にどのくらいになりますか。」の割合の経年比較(同一学年)



同一児童生徒の経年比較を見ると、「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、中学1年から中学2年にかけて1.7ポイント増加している。しかし、小学6年から中学1年にかけては、「まったく読まない」又は「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合が5.2ポイント減少するなど、読書をする時間は増加傾向にあったが、中学1年から中学2年にかけて「全く読まない」と回答した生徒が5.9ポイント増加し、中学1年と比べて読書する時間が増えた生徒より、読書をしなくなった生徒の割合が高くなっている。[図2]



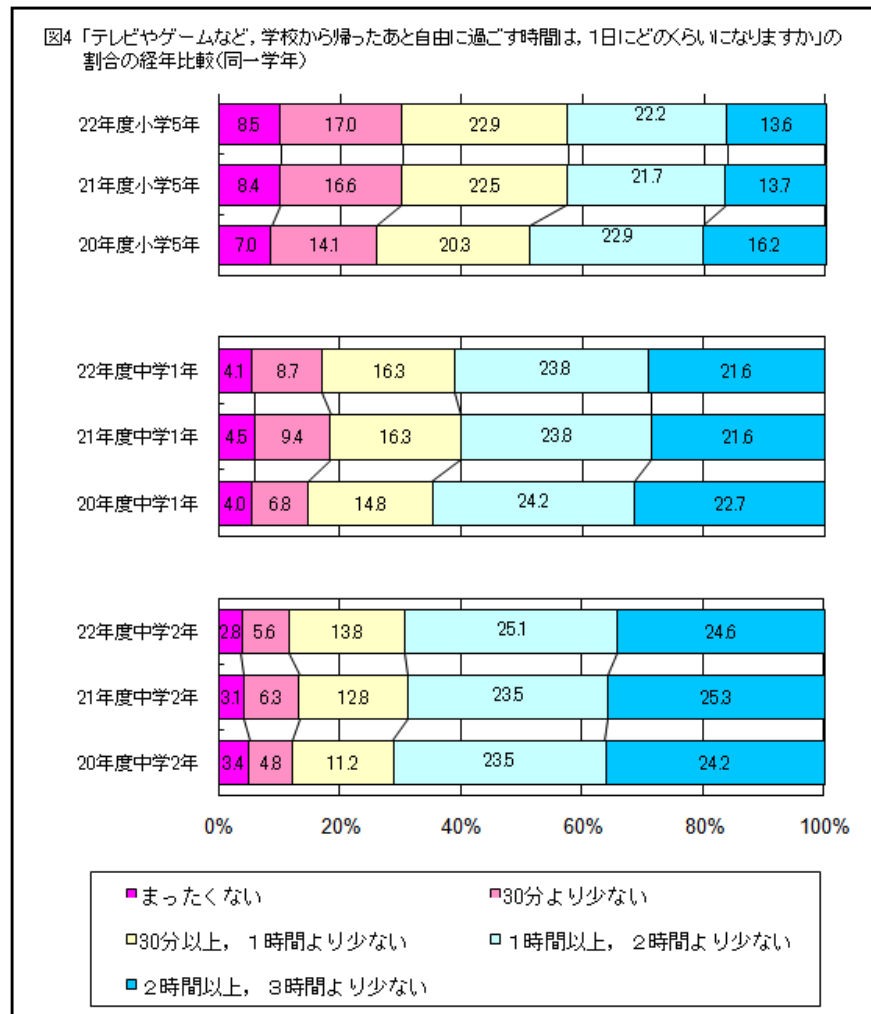
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の正答率が最も低く、小学5年と中学1年では読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなる傾向が見られる。中学2年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなってはいるが、全体的には同様の傾向が見られる。[図3]



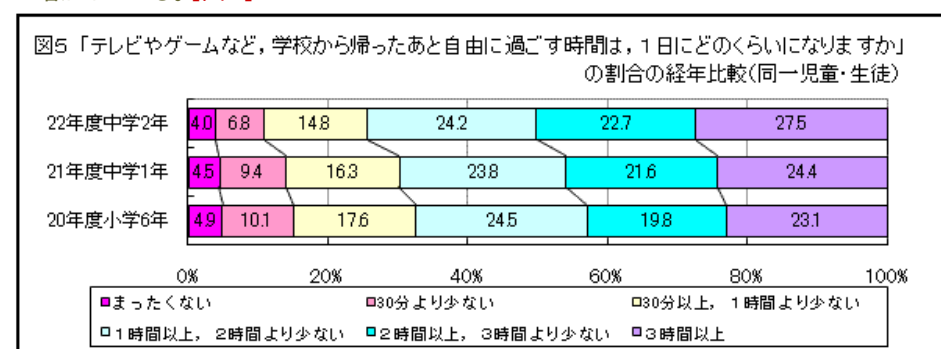
読書をする時間と全教科平均正答率との関連が見られることから、小学校段階で家庭での読書習慣を確立させ、中学校に上がっても継続して読書ができる環境を整えることが大切である。また、各学校において10分間読書や家庭との連携を工夫することが望まれる。

「テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「3時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年25.5%、中学2年28.1%になっており、中学1年と中学2年で一番多くを占めている。また、学年が上がるにつれて、時間が増えている。

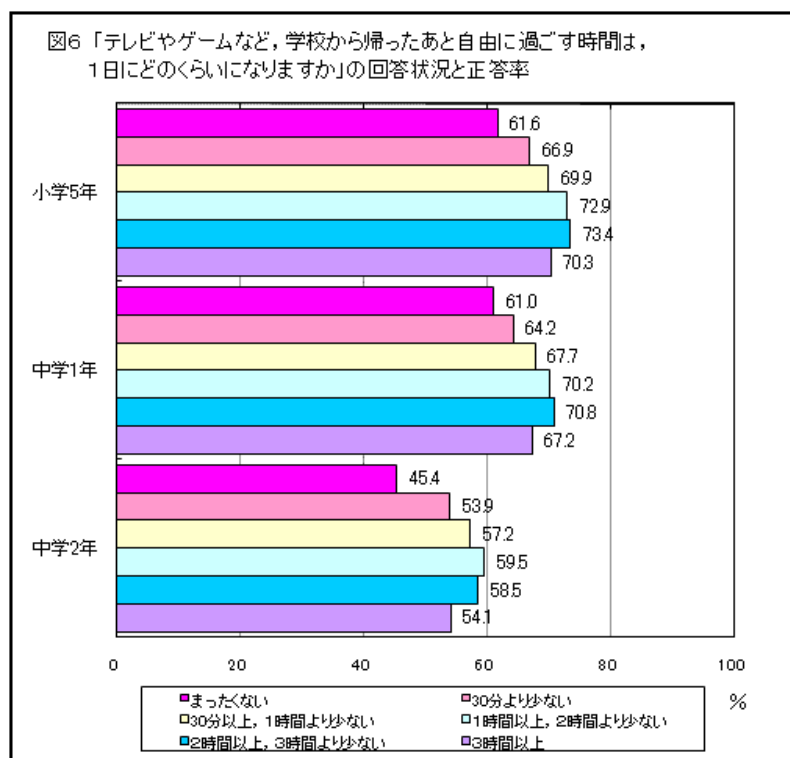
同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、2時間以上と回答した児童生徒の割合が、少しずつ低くなっているが、中学1年では、前年度調査と比較するとやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、2時間以上と回答した児童生徒は、小学6年から中学1年にかけては3.1ポイント、中学1年から中学2年にかけては4.2ポイント増加しており、学年が上がるにつれ、テレビやゲームなど、自由に過ごす時間が増加している。[図5]



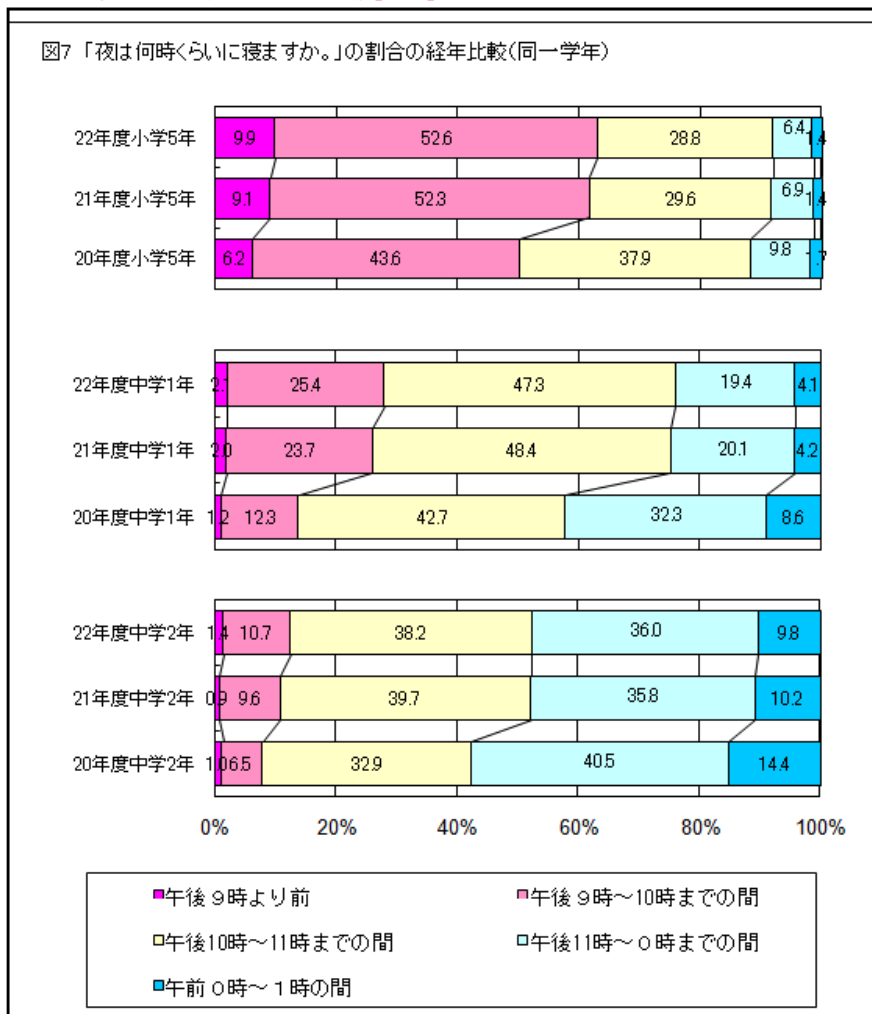
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年で「1時間以上2時間より少ない」又は「2時間以上3時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなる傾向が見られる。また、すべての学年において「まったくない」と回答した児童生徒の正答率は最も低くなっている。[図6]



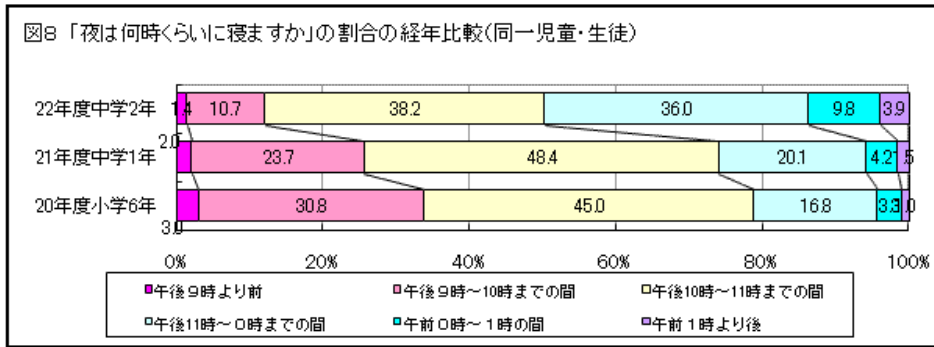
「まったくない」と回答した児童生徒の部活動や家庭での状況が把握できないが、「3時間以上」と回答した児童生徒は学習だけでなく、就寝時刻など家庭での基本的な生活習慣にもよくない影響を及ぼしている可能性がある。学校から帰宅後、就寝までの限られた時間の中で、自律的にテレビやゲームの時間を考えられるように指導することが大切であろう。

「夜は何時くらいに寝ますか」という設問については、小学校では「午後9時から10時までの間」と回答した児童の割合が最も高く、小学5年52.6%になっている。また、中学校では「午後10時から11時までの間」と回答した生徒の割合が最も高く、中学1年47.3%、中学2年38.2%になっている。午後11時以降と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

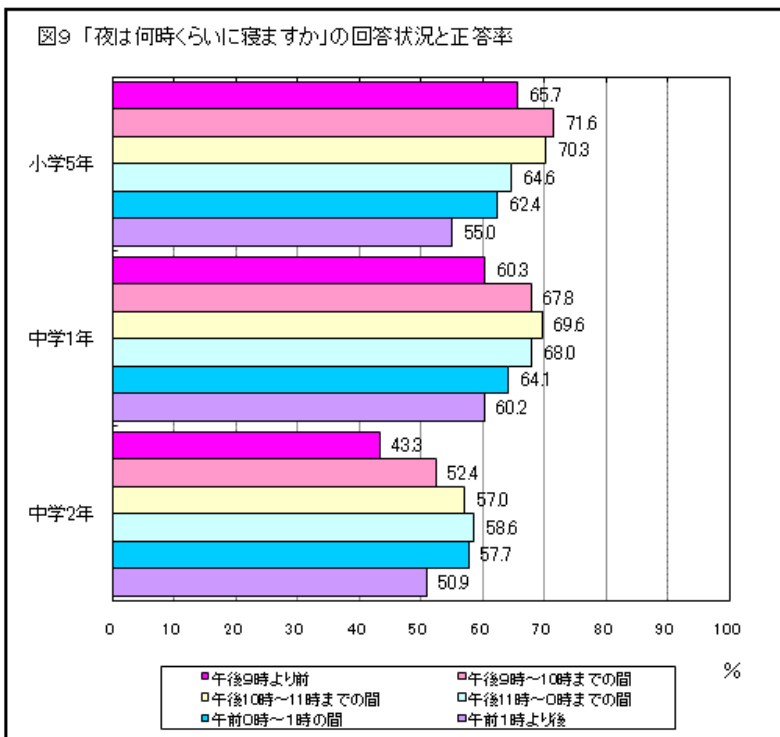
同一学年の経年比較をすると、中学校では11時までと回答した児童生徒の割合は高くなっており、11時以降と回答した生徒の割合は逆に低くなっている。小学5年では、10時までと回答した児童の割合は、高くなっており、10時以降と回答した児童の割合は逆に低くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較を見ると、全体として学年が上がると就寝時刻は遅くなるのが明らかである。小学6年から中学1年にかけては、10時以降と回答した児童生徒の割合は8.1ポイント増加している。中学1年から中学2年にかけては、11時以降と回答した児童生徒の割合は23.8ポイント増加している。【図8】



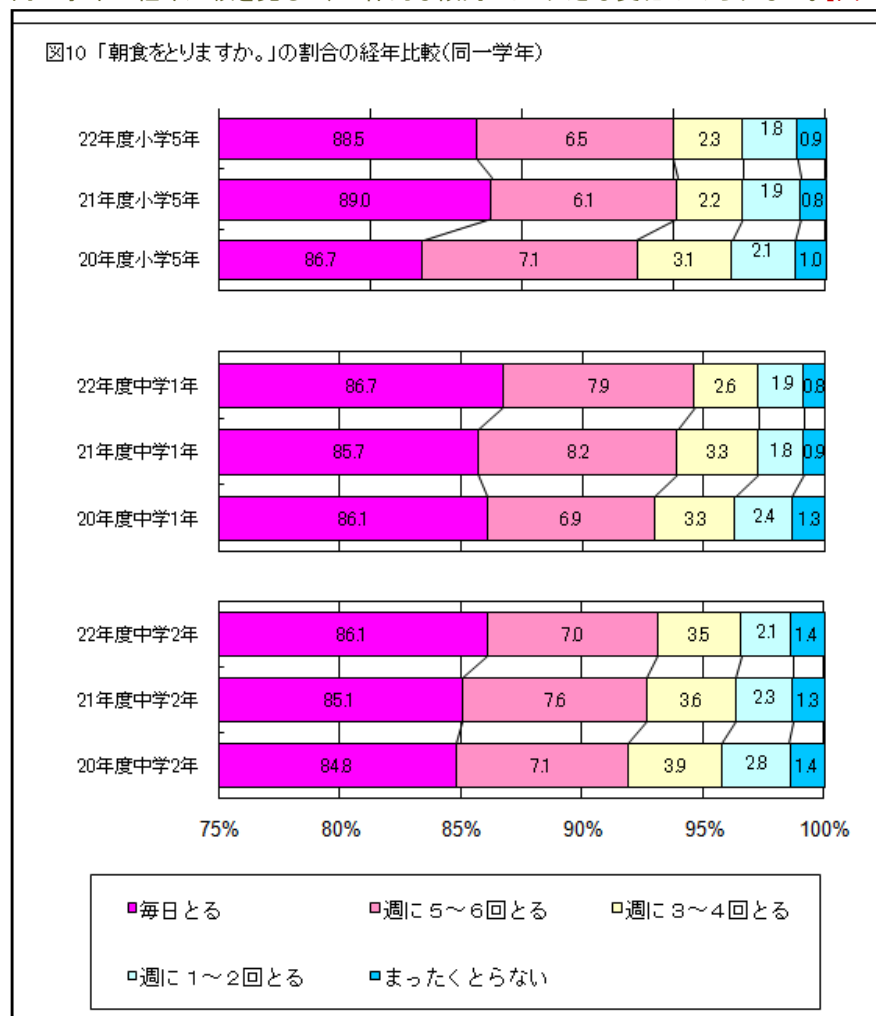
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では「午後9時から10時までの間」、中学1年では「午後10時から11時までの間」、中学2年では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。また、特に中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。【図9】



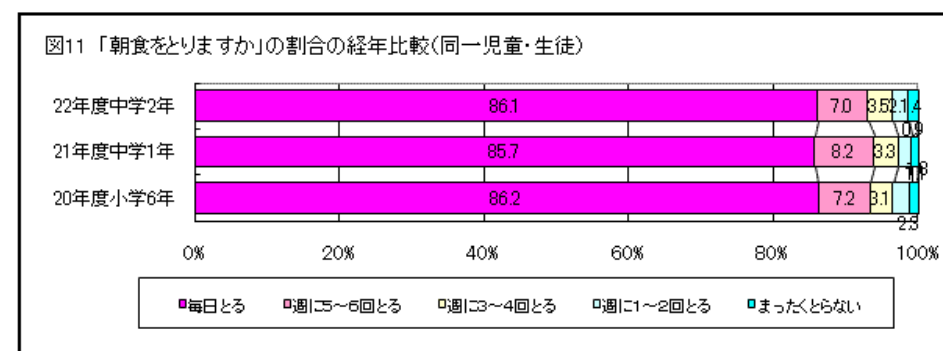
家庭学習の時間や読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間を考えると、就寝時刻が早ければよいというわけではないが、極めて遅い就寝時刻は、学習面において悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

「朝食をとりますか」という設問については、「毎日とる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年88.5%、中学1年86.7%、中学2年86.1%になっている。「週に5～6回とる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

同一学年の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化はみられない。[図10]

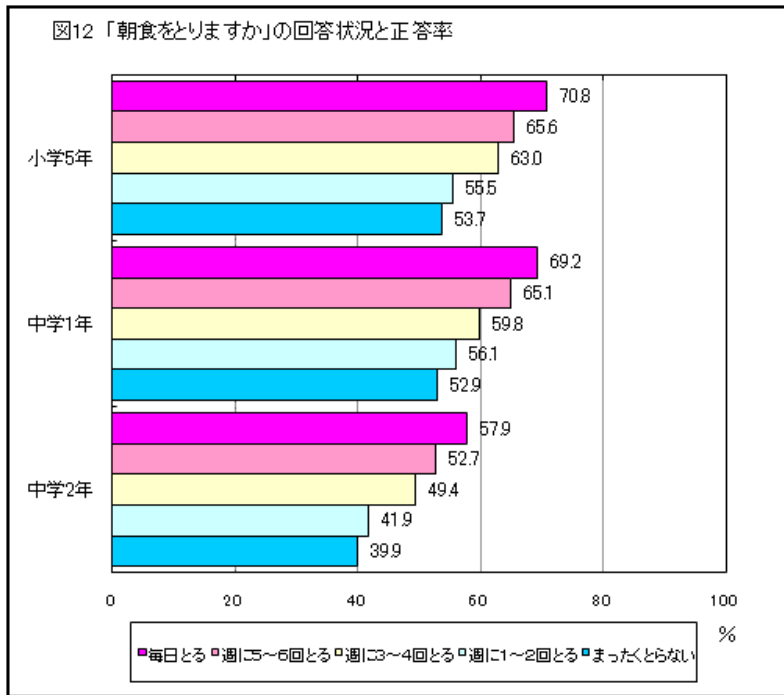


同一児童生徒の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「毎日とる」と回答した児童の正答率が最も高く、朝食をとる日数が減るにしたがって、正答率も低くなっている。

ただし、図10を見たら分かるように「まったくとらない」又は「週に1～2回とる」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図12]

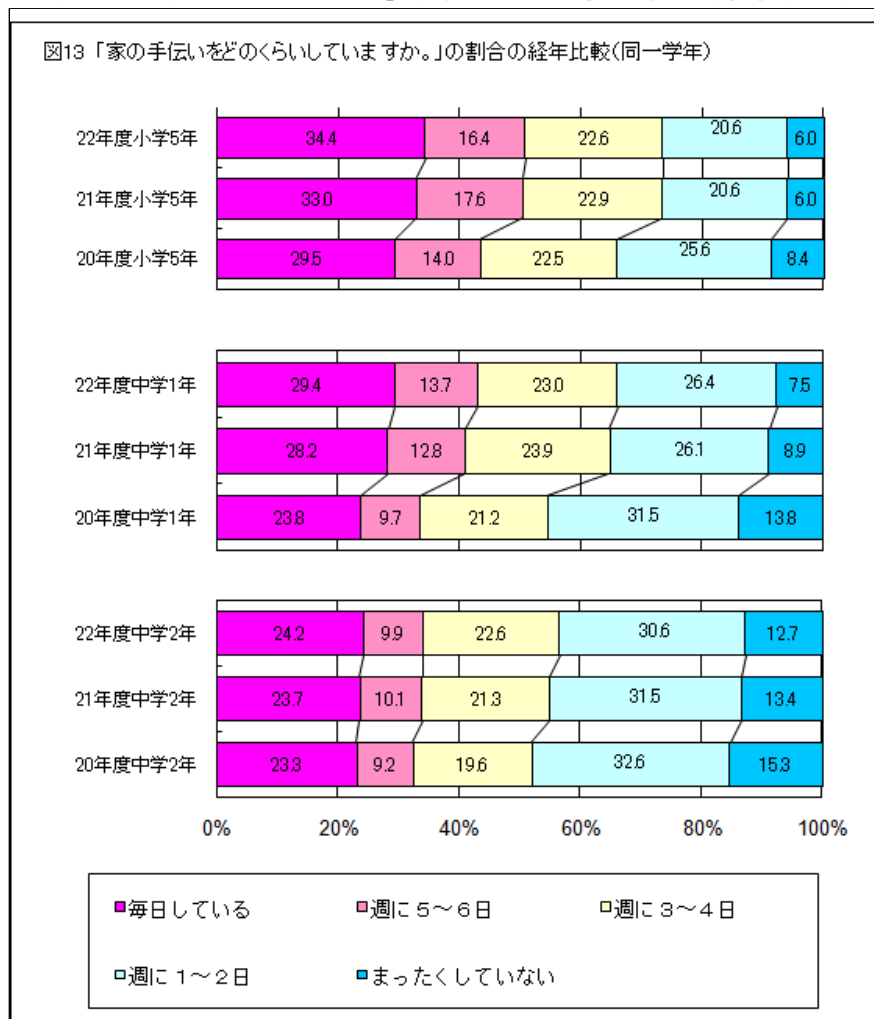


朝食をとることが、学習面にもよい影響を与えていることが考えられる。これからも家庭と連携し、食事をとることの大切さについての啓発をしていくことが望まれる。

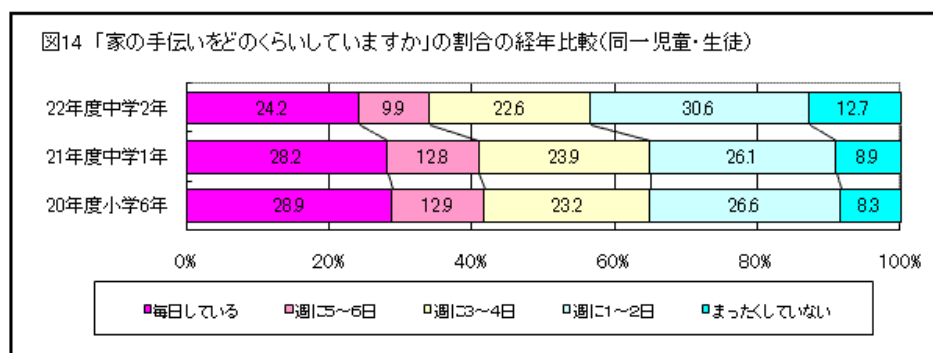


「家の手伝いをどのくらいしていますか」という設問については、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年34.4%、中学1年29.4%、中学2年24.2%になっており、すべての学年で最も高くなっている。「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、逆に「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

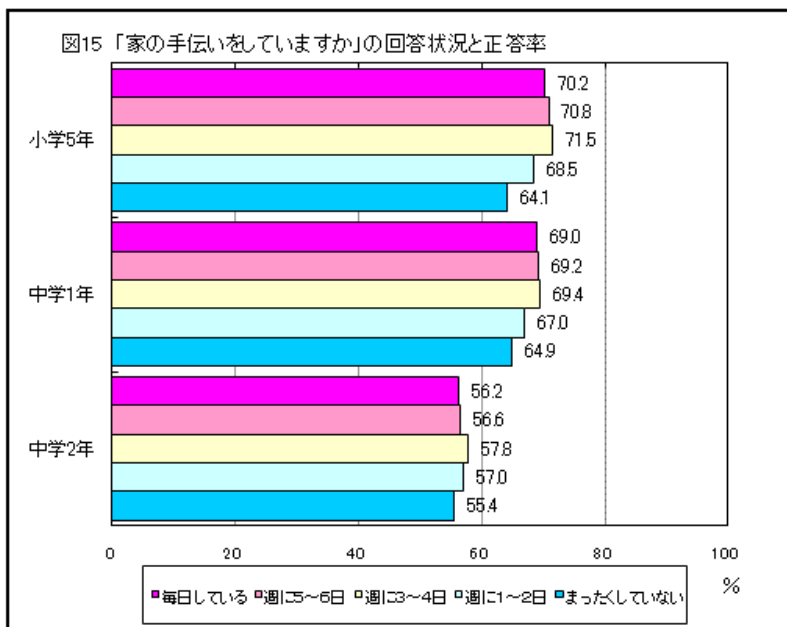
同一学年の経年比較をすると、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、すべての学年において少しずつ高くなっている。また逆に、「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも低くなっている。[図13]



同一児童生徒の経年比較を見ると、学年が上がるにつれて「毎日している」と回答した児童生徒の割合は低くなり、逆に週2日以下と回答した生徒の割合が高くなっている。[図14]



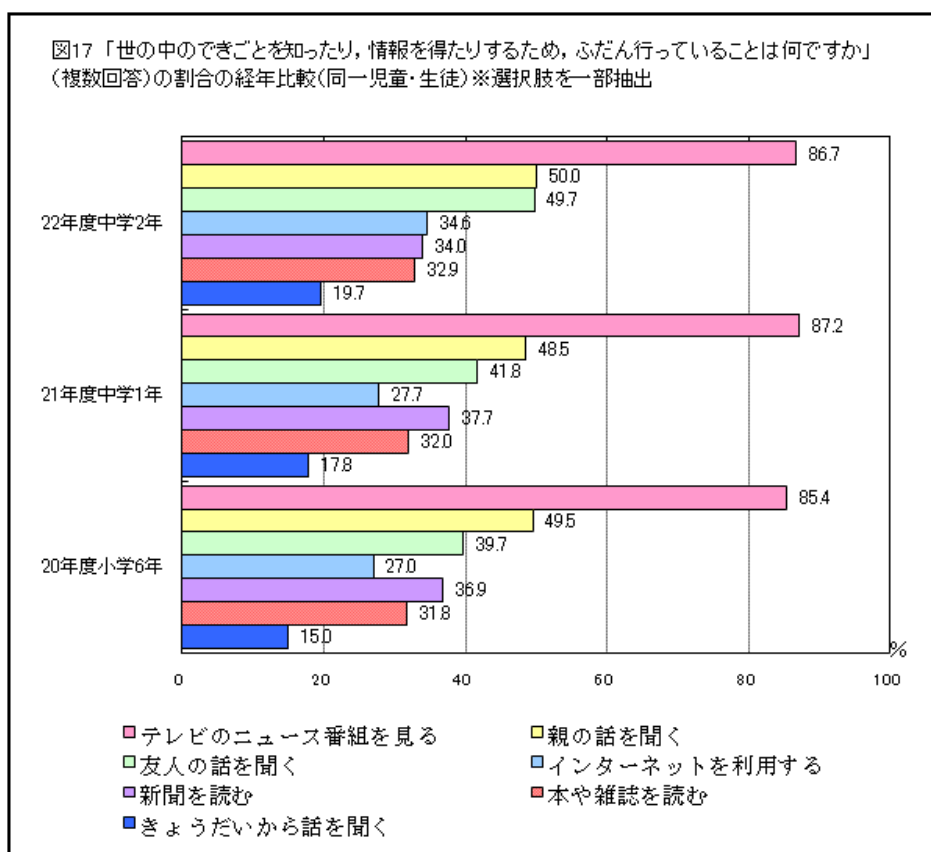
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られない。[図15]



このことから学年が上がると部活動や学習に多くの時間を費やすために、家の手伝いを「まったくしない」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向がうかがえる。生活体験を豊富にするためには、各家庭において責任をもたせた家での仕事や役割を決め、習慣化を図れるように学校と家庭とが連携して啓発していくことも大切である。

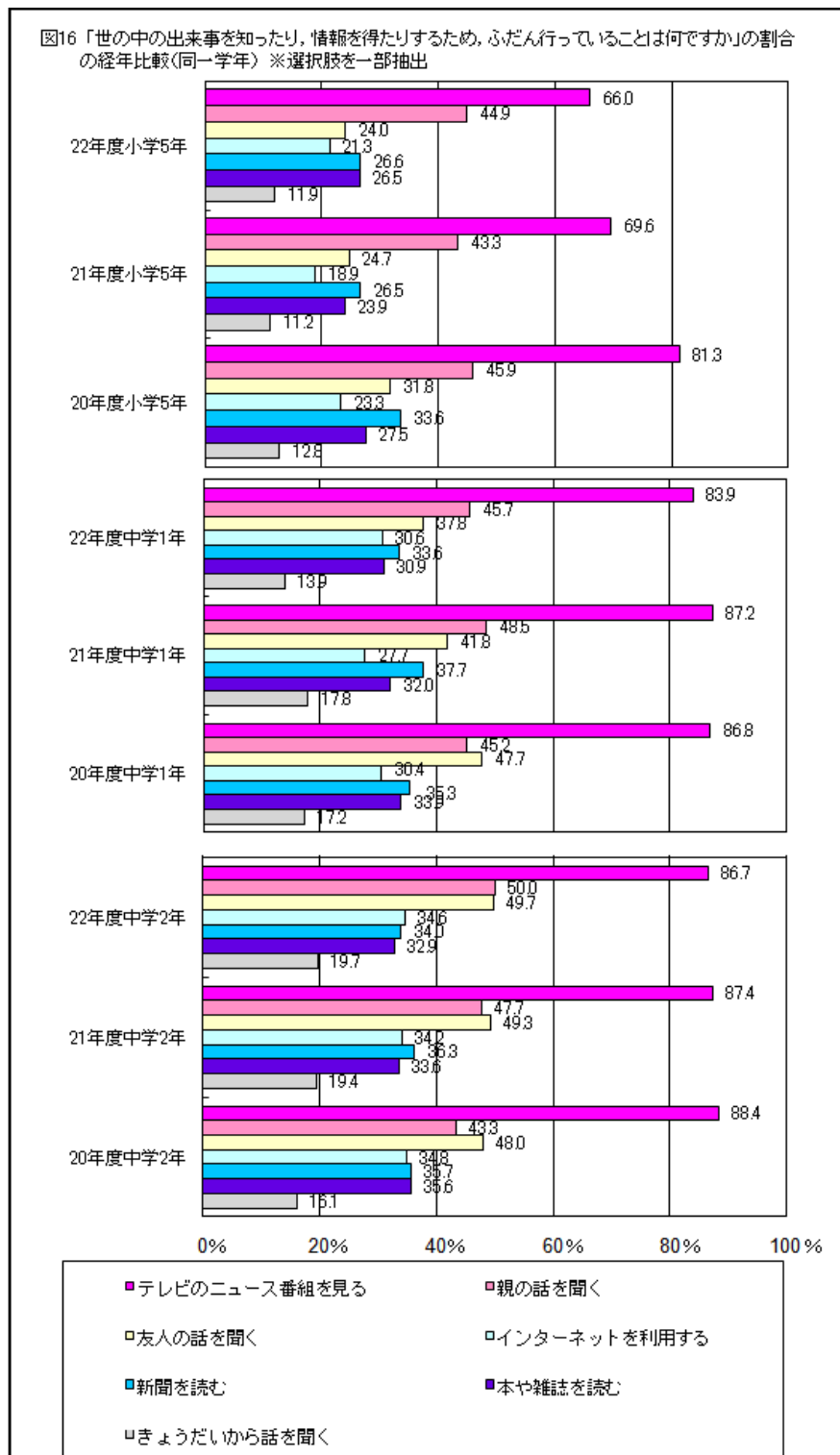
同一児童生徒の経年比較を見ると、中学1年から中学2年にかけて、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合は6.9ポイント、「友人の話を聞く」は7.9ポイント増加している。その他の項目については大きな変化は見られない。

[図17]



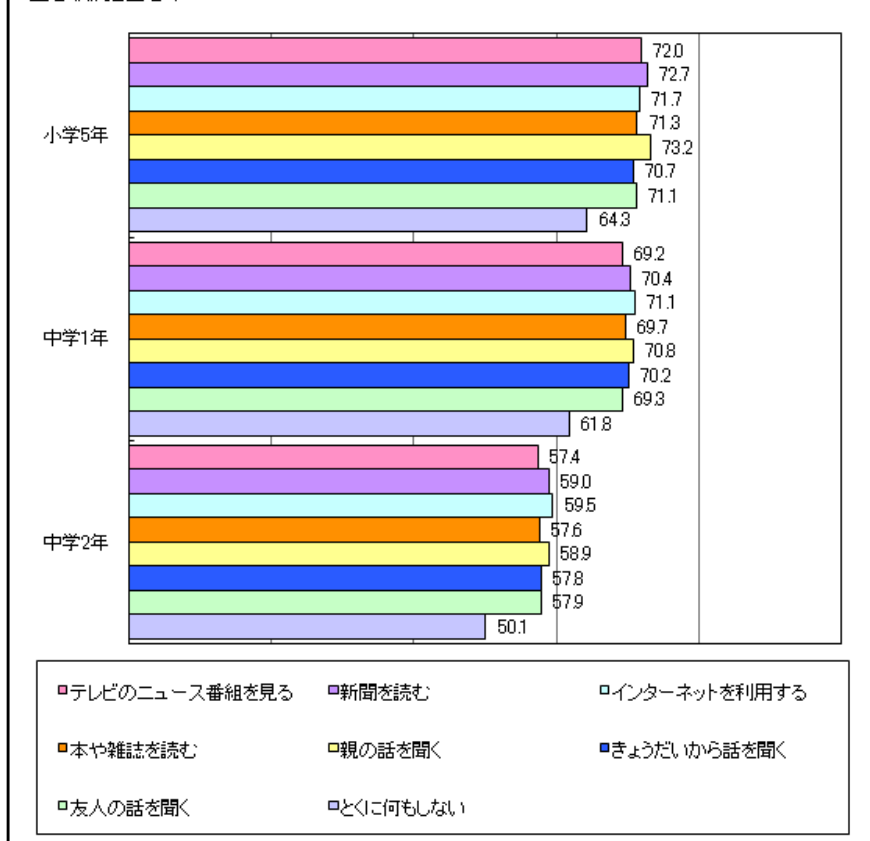
「世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん行っていることは何ですか」(複数回答)という設問については、学年が上がると「友人の話を聞く」、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向が顕著に見られる。「テレビのニュース番組を見る」と回答した児童生徒の割合は、小学5年66.0%、中学1年83.9%、中学2年86.7%になっており、各学年ともいちばん多くを占めている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学2年では「親の話を聞く」と回答した生徒の割合はやや高くなっている。小学5年の「テレビのニュース番組を見る」「友人の話を聞く」と回答した児童の割合と、中学1年の「友人の話を聞く」と回答した生徒の割合は低くなっている。**[図16]**



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、すべての学年において、「とくに何もしない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。**[図18]**

図18 「世の中のできごとを知ったり、情報を得たりするために行っていること」(複数回答)の回答状況と正答率



これら2つの結果から、学年が上がるごとに、インターネットを利用し情報を得ることができる児童生徒の割合が増加していることがうかがえる。また、正答率との関連を見ると、わずかではあるが、インターネットを利用する児童生徒の正答率が高い傾向にあることが分かる。逆に「とくに何もしない」児童生徒の正答率が低いことも分かる。いろいろな手段で情報を得るスキルと習慣を身に付けさせることが重要であると言える。

最終更新日： 2011-1-31

## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

### 児童生徒意識調査の結果の分析

#### 5 家族関係

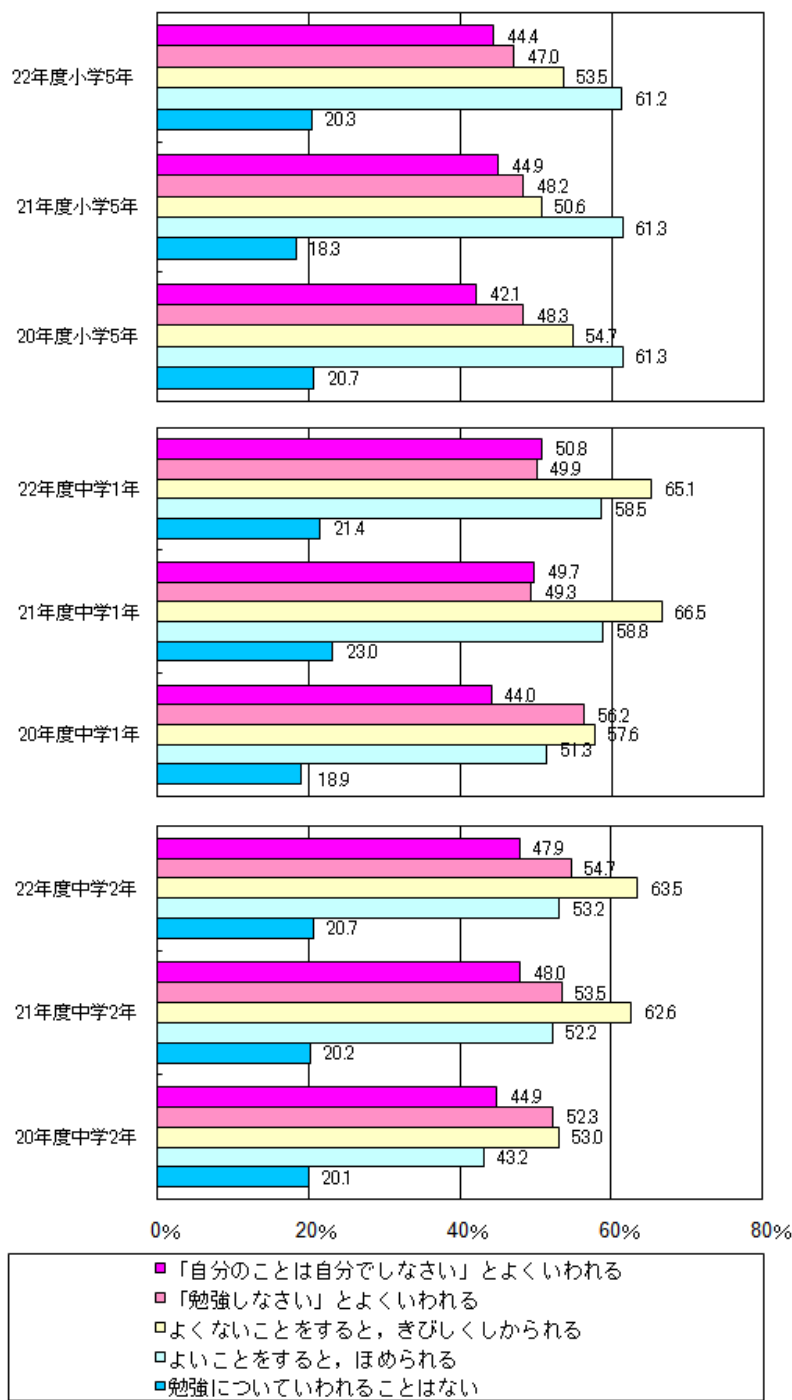
- 家の人といっしょにいる方が楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学5年と中学1年で8割、中学2年で7割を上回っており、前年度と比べると高くなっている。[図4]
- 日ごろ家の人が自分にかまうことはほとんどないと感じている児童生徒の平均正答率は、低くなっている。[図3]

この節では、きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識についての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

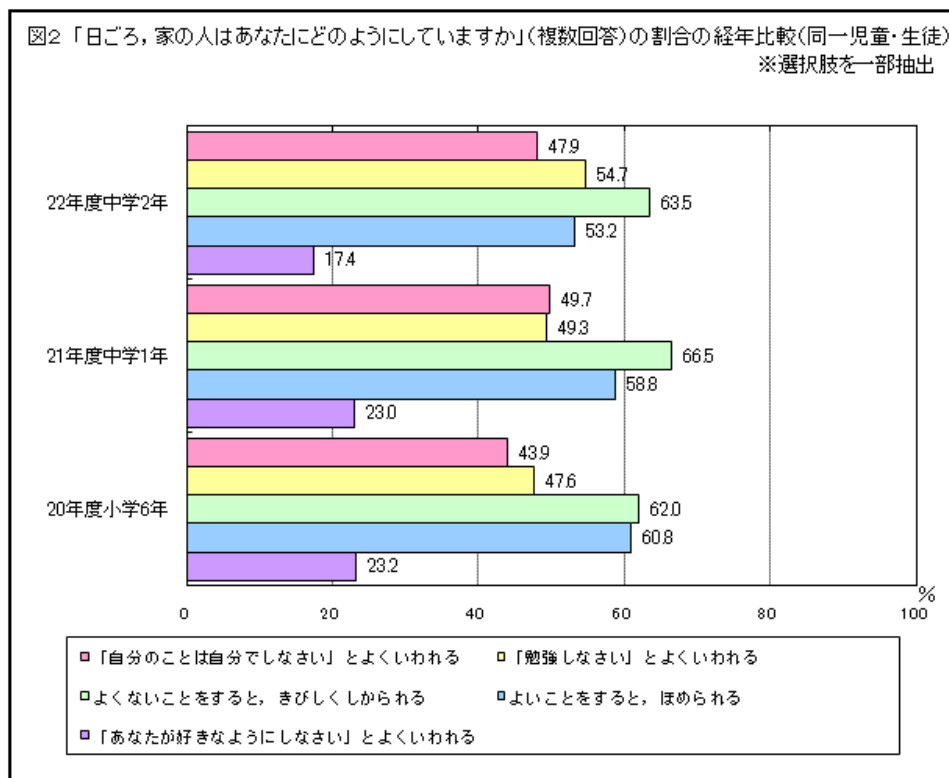
**「日ごろ、家の人はあなたにどのようにしていますか。」(複数回答)**という設問については、すべての学年において「よいことをすると、ほめられる」、「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合が高く、いずれも全体の5割を上回っている。しかし、学年が上がるにつれて「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が低くなる傾向が見られる。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学1年では特に「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」、「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」、「勉強しなさいとよくいわれる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学2年でも「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が特に高くなっている。[図1]

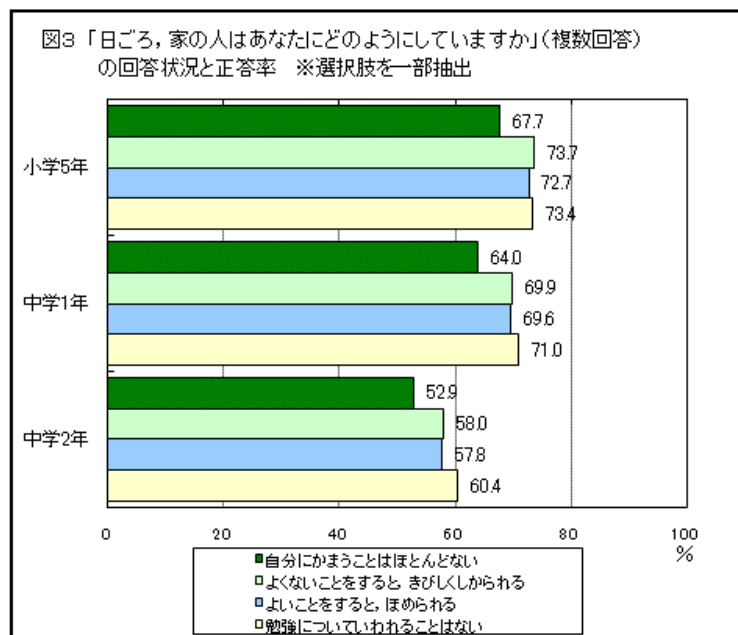
図1 「日ごろ、家の人はあなたにどうしていますか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年)  
 ※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」5.8ポイント、「よくないことをすると、きびしくしかられる」4.5ポイント、「勉強しなさいとよくいわれる」1.7ポイントと、それぞれの項目に回答した児童生徒の割合は増加している。また、中学1年から中学2年にかけては「勉強しなさい」が5.4ポイント増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図3]

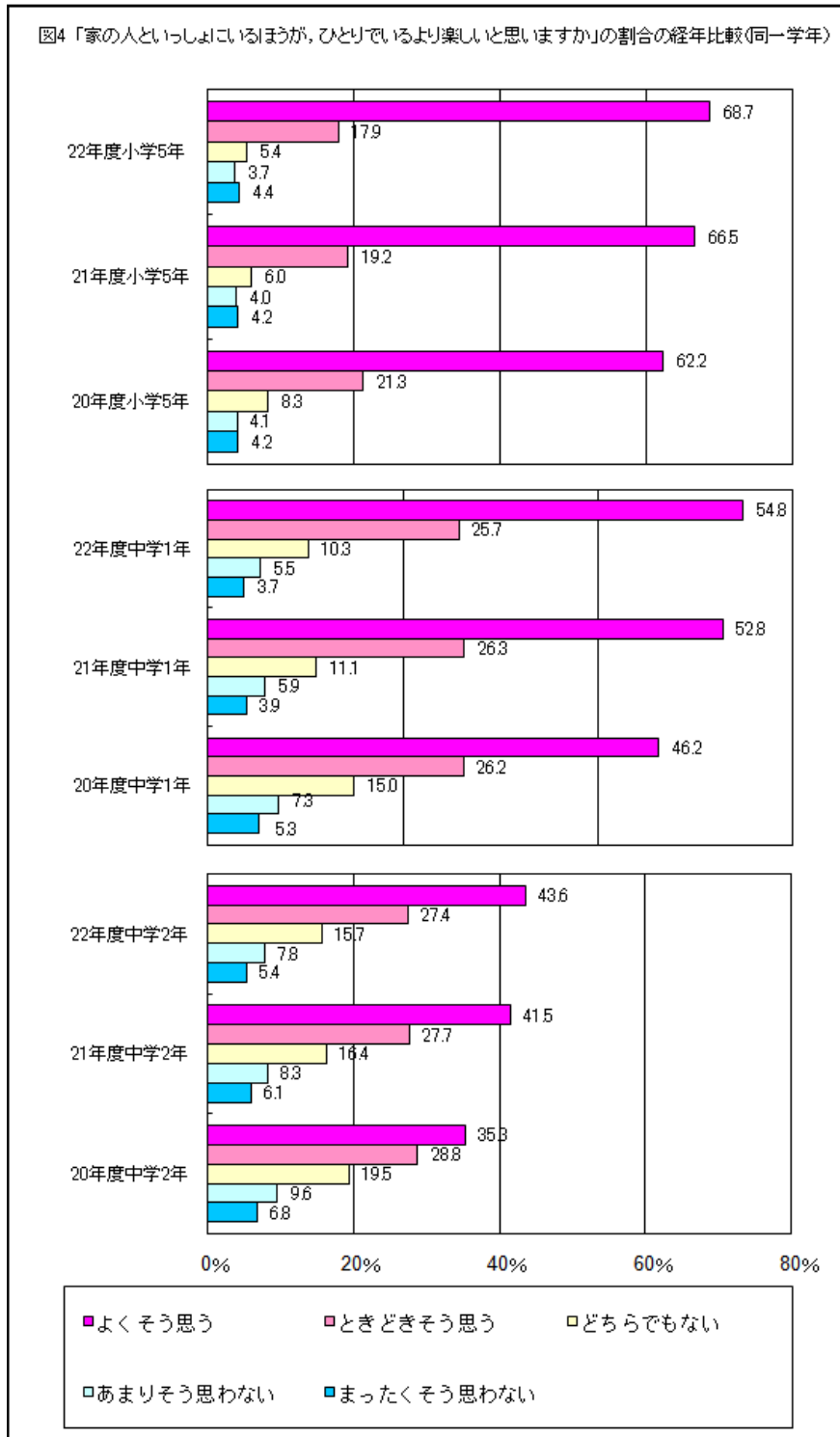


児童生徒の発達の段階に応じた家族の対応とも考えられるが、学年が上がると児童生徒の「家の人からほめられる」という意識が低くなっていくことは気になる点である。家族との温かなかわりは生徒にとって自己有用感を喚起するなどのよい影響を及ぼすであろう。

「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒は少数ではあるが、これらの児童生徒に対して、教育相談などの個別の対応が望まれる。

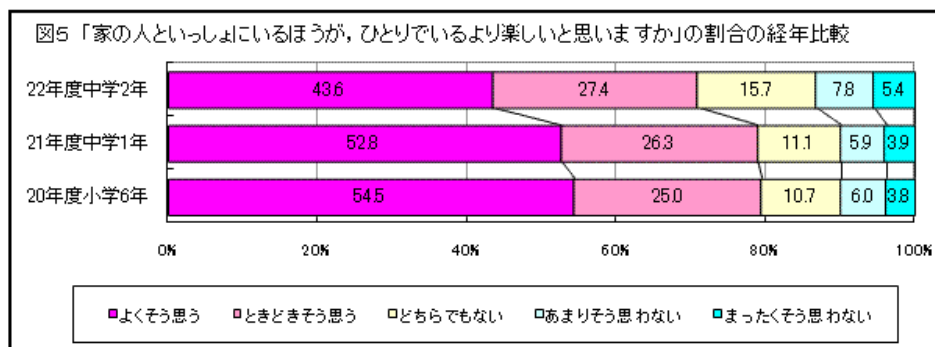
「家の人といっしょにいるほうが、ひとりでいるより楽しいと思えますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年68.7%、中学1年54.8%、中学2年43.6%になっている。「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせても、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。

この設問を前年度調査と比較すると、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。また、中学校では「どちらでもない」と回答した生徒の割合はやや低くなっている。[図4]

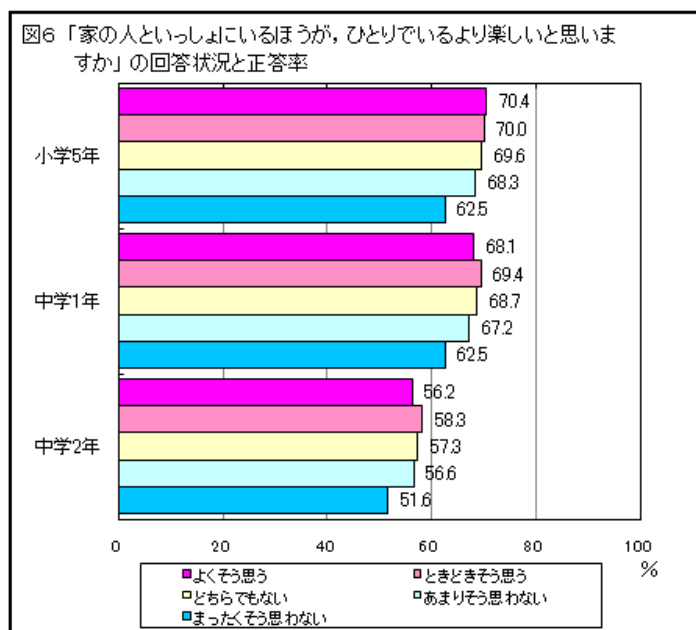




同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒は、中学1年から中学2年にかけては9.2ポイント減少している。小学6年から中学1年にかけては全体の傾向として大きな変化は見られない。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図6]



「まったくそう思わない」と回答した児童生徒については、保護者との面談などを通して家族とのかかわり方を把握して、必要に応じて教育相談などの対応が望まれる。

## 平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ&gt; IV 児童生徒意識調査の結果の分析

## 児童生徒意識調査の結果の分析

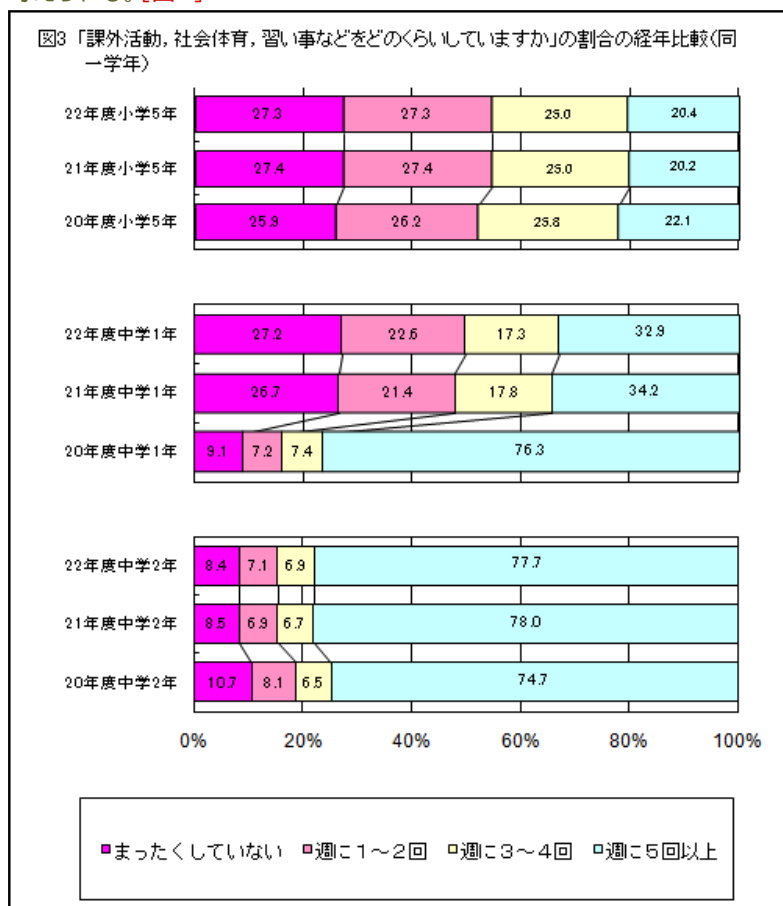
## 6 課外活動や部活動・地域における生活

- 課外活動や習い事を「まったくしていない」と回答した児童生徒の平均正答率は、各学年において最も低くなっている。[図3]
- 学年が上がるにつれて、地域行事やボランティア活動に「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。また、同一児童生徒の比較においても同様の傾向が見られる[図4][図5]

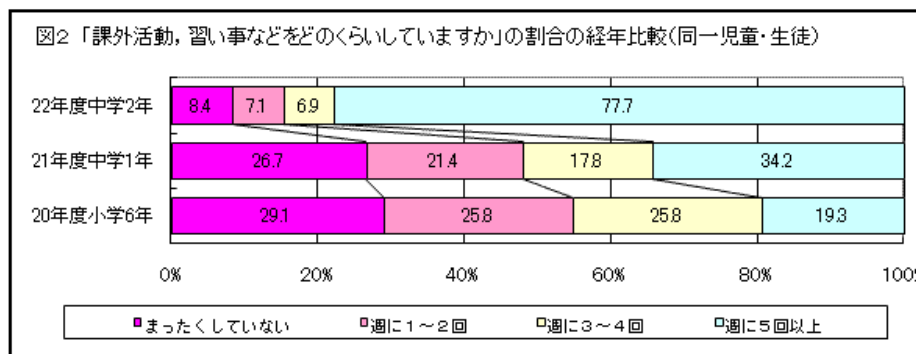
ここでは、課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度についての設問から児童生徒の地域における生活についての調査結果を述べる。

「課外活動(中学校では部活動、社会体育)、習い事などをどのくらいしていますか」という設問については、小学校では「まったくしていない」、「週に1～2回」、「週に3～4回」、「週に5回以上」と回答した児童の割合は、約20%から28%とほぼ均等になっている。中学校では「週に5回以上」と回答した生徒の割合は、中学1年32.9%、中学2年77.7%になっており、それぞれの学年で一番多くを占めている。

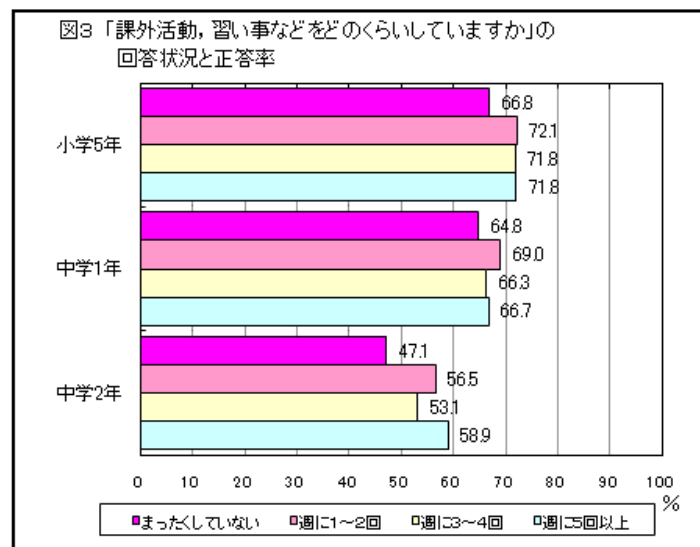
この設問を前年度調査と比較すると、すべての学年で全体的な傾向として大きな変化は見られない。平成20年度の中学1年では「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合が高くなっているが、12月調査であり生徒の入部状況が違うためだと考えられる。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて14.9ポイント、中学1年から中学2年にかけて43.5ポイントと大きく増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくしていない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。また、中学2年では、「週に5回以上」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。[図3]

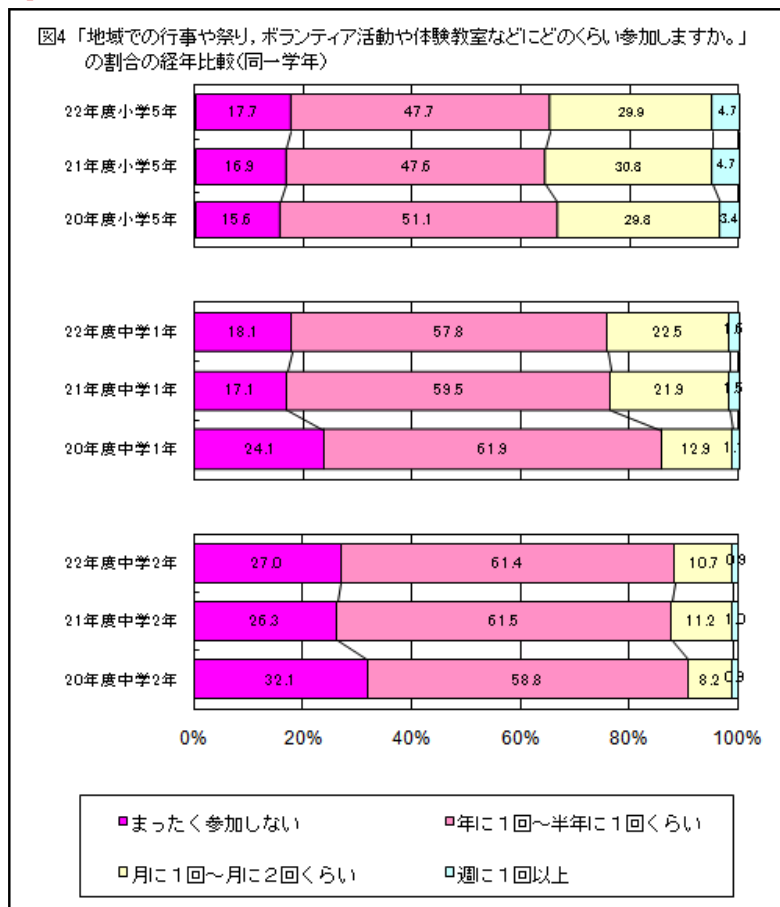


特に中2での「まったくしていない」と回答した生徒の正答率が低いことについて、放課後の自由に使える時間が多いにもかかわらず、有効に活用できていないことが考えられる。

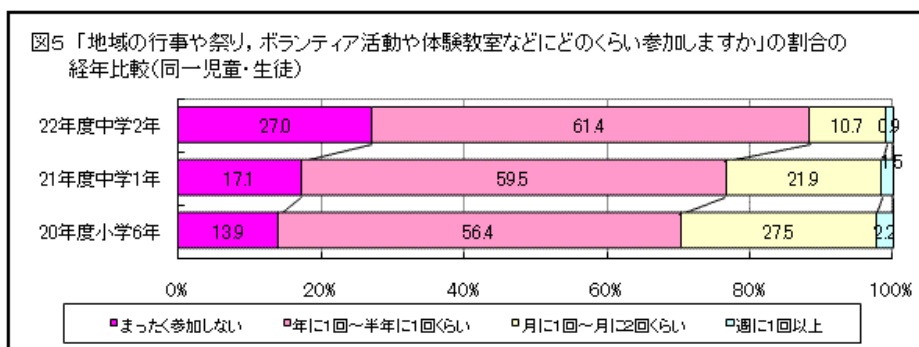
帰宅後、何もしていない生徒については、学校と家庭の連携を深めつつ生活指導の充実を図り、家庭学習に取り組むことができるようにすることが重要である。

「地域での行事や祭り、ボランティア活動や体験教室などにどのくらい参加しますか」という設問については、「年に1回～半年に1回くらい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年47.7%、中学1年57.8%、中学2年61.4%となっており、各学年ともいちばん多くを占めている。学年が上がるにつれて、月に1回以上と回答した児童生徒の割合は低くなり、「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学校では「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合が高くなっている。[図4]

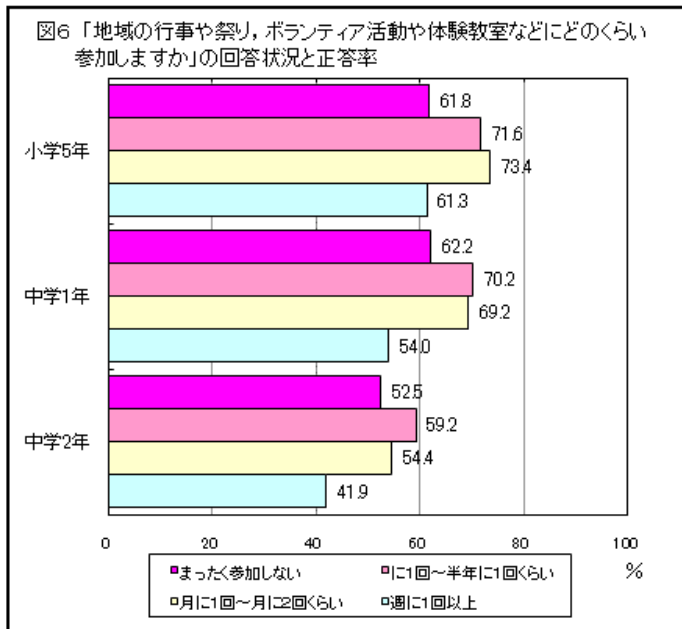


同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学2年にかけて「全く参加しない」、「年に1回～半年に1回」と回答した児童生徒が18.1ポイント増加しており、学年が上がるにつれて参加する割合は減少傾向にある。中学校では、部活動へ参加する生徒も増え、地域の行事や祭りなどへの参加は少なくなっている。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく参加しない」と回答した児童生徒と「週に1回以上」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図6]

ただし、図5を見たら分かるように「週に1回以上」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても2%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。



学校は、各家庭と地域を結んだり、地域行事をサポートする等が考えられる。また、児童生徒が地域や社会に目を向け、関心をもち主体的にかかわれるように、日常の学校生活や学習活動の中で働きかけることが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31